これも恋の始まり？～不器用な恋物語～

山口維音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
これも恋の始まり？～不器用な恋物語～

【Ｎコード】
Ｎ１５５９Ａ

【作者名】
山口維音

【あらすじ】
恋人の賢一に振られた私、槻岡夏海（ツキオカナツミ）。翌朝、目が覚めると隣りには・・・！誰でもいいから、この状況を説明して！（して下さい・・・）

ａｃｔ１　朝、目が覚めると……（前書き）

この物語は夏海・梓・蓮子を主人公にした物語のシリーズ物です。シリーズ第１弾では夏海を主人公にした物語「これも恋の始まり？」を連載していきたいと思います。主人公それぞれの不器用ながらも、次第に咲かせる恋の花・・・。１度はそんな恋もいいかな・・。

ａｃｔ１　朝、目が覚めると……

誰でもいいから、今の状況を説明して欲しい……。
ここは、どこなのか。そして、何故私はここにいるのか。
そして……
今、自分の隣で寝ている男は誰なのか……

槻岡夏海。生まれて２０年、こんなにも窮地に立たされているのは初めてかもしれない。
「落ち着け、夏海。昨日何があった？　昨日……」
自分に言い聞かせながら、必死に記憶を探す。その間、隣で寝ている男はずっと夢の中にいる。
いい気なモノね。こっちは二日酔いで痛む頭を押さえながら今の状況に焦っているというのに……。
でも、こんな事している場合じゃない。
“彼”が起きない様にこっそりベッドから降りると、床に落ちている服や下着を拾って身に着けて静かに部屋を後にした。
「冗談じゃないわよ！　何で知らない男なんかと……」
一夜を共にしているのか。小声で呟きながら外に出ると、そこは全く知らない場所。辺りを見回してから、改めて自分が情けなくなる。
仕方がないから、携帯で幼馴染の琉依に助けを求めた。
「琉依？　お願い迎えに来て！」

「……何？　また飲んでたの？」
まだ明け方だった為、電話の向こうから聞こえる琉依の声はかすれていた。
「……で、今どこにいるの？」
琉依の言葉に、さっきまで自分がいた場所を見上げると、
「ホテル？　クィーンホテル……」
「ホテル！？」
琉依のかすれた声が、驚きの声に変わる。そりゃ、仕方ないわ。
本当、私って何しているんだろう……

ａｃｔ１　朝、目が覚めると……（後書き）

こんにちは。ヤマグチです。２作目の小説です・・。１作目も恋愛ですが、前作とはまた違った恋愛を描いてみました。不器用な恋を始める？夏海の行く先を読んで頂けると嬉しいです。

act2　予期せぬ再会

琉依が来るのを待つ間、私はずっと昨夜の記憶を探していた。
講義が終わって、蓮子や梓とショッピングへ行こうとしたら……
「あっ」
思い出した。そうだ、その時恋人の賢一が来て……
「あ～そうだ！　振られたんだよ、私は」
私とはもうやっていけないって、別れを告げられてしまったんだっけ。それから、私の答えを待たずに去っちゃって。
「そうそう、終わっちゃったんだ」
それから、一人で飲んでいたら“彼”がいたのか……いなかったのか。
「だめだ！　そこから思い出せない」
ただ、分かるのは名前も知らない男と寝てしまったということ。
「だ～っ！　しばらくは酒は控えないとね」
一人反省していると、目の前に車が止まった。中から琉依が降りてきて、座り込んでた私の顔を覗き込むと、
「おうち、帰ろうね？」
と、笑顔で言った。
たった一言なのに、琉依の言葉はなぜか気が緩んで涙が出てくる。
琉依はそんな私を見ると、私を軽々と抱き上げて車に乗せ、その場を後にした。

「賢一にね、振られたの」
運転している琉依に話しかけた。琉依は横目でこっちを見ると、
「そう……」
ただ一言だけ言うと、再び運転に集中していた。
何も聞かないのね。でもそれが琉依なりの優しさだった。

「じゃあ、後でね」
しばらく車を走らせてから、家の前で私を降ろすと琉依は再び車を発車させた。
琉依の家は、私の家から歩いて行けるほど近い。だから大学へも毎日一緒に行っていた。
「憂鬱……」
ため息をつきながら、家の中へと入っていく。
別れた賢一とは同じ大学。これから毎日会うかと思うと、ため息も出る出る。
今までは早く会いたいなと思っていたのが、1日過ぎるのも嫌になるなんて昨夜までは思っていなかった。

――――

「あ～頭痛い」
さっきまで忘れていた二日酔いの症状が、一気に襲ってくる。教室で頭を押さえていると、
「ちょっと～、二日酔い？」
隣に蓮子と梓が座る。
二人は学部が違うが、1限が始まるまでは私の教室で話をしていた。
「夏海ちゃん、昨日賢一君と羽目を外しすぎたのね」
梓の言葉に一瞬動揺してしまった。これだけで動揺するなんて。
「夏海？」
蓮子が顔を覗き込んでくる。
「あっ、そうそう！　私振られたんだよ、賢一に。“もうやっていけない”って言われてさ」
自分でも分かるくらい無理して笑顔を作って2人に話した。
「えっ？」

２人の表情は、驚きのものと“しまった”という様子を表していた。
「夏海ちゃん、大丈夫？」
梓が心配してくれている。本当にいい子なんだから。
「大丈夫、大丈夫。１人で飲んだらスッキリしたから」
なんて、ウソ。そんな事で忘れられる程の恋だった訳じゃない。
順調にいってて、これからもその気持ちは変わらないと信じていた。
私は、そう思っていた。

トンッ

その時、私の前に小さな紙袋が置かれた。
「えっ？」
それを置いた人物を見て、私は思わず凍り付いてしまった。
「昨夜の忘れ物ダヨ、槻岡夏海サン」
その人物は他の誰でもない、今朝ホテルで一緒にいた“彼”！
何で私の名前を……っていうか、何でここに？
「なっ……」
驚きの余り、何も言えないでいた私に対して“彼”はニッコリ笑うと、
「じゃあね」
手を振りながら、そのまま教室を去っていった。
小刻みに震える私の横で、蓮子は紙袋の中身を取り出した。紙袋の中身は……
「パンスト……」
蓮子はそれを私にちらつかせると、
「昨夜、１人で何してたって～？」
再び顔を覗き込んでくる。ホント、カンベンしてよ……

act3　優しい琉依

「……で、気が付いたらさっきの彼と同じベッドの中って訳ですか」

しつこく聞いてくる蓮子のせいで、一限目の講義をサボって構内の喫茶店で二人に説明すると、蓮子が目を細めて言った。

「夏海ちゃんったら」

お嬢様の梓にとったら、こんな事は考えられない事なんだな。

それにしても、“彼”は一体何者？　どうしてここにいたのか。

「そういえば、さっきのパンストの彼だけど見たことあるわよ」

「誰っ！　誰なの？　アイツは」

思わず蓮子に飛びついて尋ねた。さすが、男好きの蓮子だけあってそこいらの男はチェック済みなのね。

「同じ大学の人よ。確か文学部……国文学科だったかな。夏海は国際学部だから知らなくて当然だわ」

そういうあんたも、社会学部で本来なら知り合う事すら無いのに……と思ったが、蓮子には言うだけ無駄だった。そんな蓮子の隣りで梓は何かを考えていた。

「あら？　夏海達じゃない。どうしたの？」

全員が振り返ると、そこには伊織が立っていた。

「ちょっと、夏海に事情聴取中！　そういうあんたは、今頃来たの？」

「そうなのよ、昨日の稽古が遅くまで続いてさっきまでグッスリ。夜更かしは美容に悪いのよねぇ」

蓮子の問いに、伊織はそう可愛らしく欠伸をして話す。伊織は、

おネェ口調ではあるがれっきとした“男”である。そして、
「おはよん、梓」
梓の頭にキスをするこの一応男は、梓の彼氏でもある（オカマだけど）。2人が付き合うようになってしばらく経つが、未だに信じられないくらいだ。
けど、2人が仲良くしているのを見ると賢一との事を思い出す。
「事情聴取は終わりね。私、レポートを出してくる」
「夏海？」
立ち上がると、蓮子の声に振り返らず手を振って喫茶店を後にした。今の自分の顔を誰にも見られたくなかった。
流れてくる涙を拭きながら歩いていると、広場で寝転んで煙草を吸っていた琉依の姿が視界に入った。側に寄って琉依の顔を覗き込むと、琉依は笑顔で返した。
「講義は？」
泣き声で琉依に問いかけると、
「夏海いないから、サボっちゃった」
相変わらず琉依は笑ったままだった。そんな笑顔につられて私も、
「せっかくノートを写させてもらおうと思っていたのに」
そう、笑顔で答えた。
何も聞かないし、何も言わない。わかってる、それがあんたの優しさっていう事を。

「……っていうか、パンスト忘れたらダメでしょ」
隣りで寝転んでいる琉依の突然の一言に、思わず飛び起きてしまった。
「何で知ってるのよ！」
あぁ、蓮子だ。朝、教室でパンストをちらつかせていたら、誰の目にも留まりますわな。
琉依はケラケラ笑っていた。確かに迂闊だったが、あの状況ではとても周りの確認ができる程の余裕はなかった。まぁ、普段から女

遊びをしている琉依ならそんなヘマはしないのでしょうけど。
「当たり前でしょ。俺は寝る女とは情事の一期一会。後々が面倒だから、そんな再び会う口実が出来るようなヘマはしませんよ」
言っている事にやっている事は最悪だけど、なんだかんだ言って長く付き合っていられるのは、そんなところを嫌だと思わせない琉依の魅力のせいなのだろう。
しかし、関係を持った女とは一期一会だという琉依にも例外がいる事を私は知っている。長い付き合いの私でさえも、未だに不思議さを感じるこの……
「バカ！」
私の膝枕で寝入った琉依の頭を軽く叩いた。こんなバカでも、恋ではない愛しさを感じさせる。
ふと顔を上げた私の視界に、再びあの“彼”が現れた。
「あっ」
立ち上がり行こうとしたが、琉依が寝ていた為それはできなかった。
“彼”はそのままその場から去っていった。私と琉依の関係でも誤解されたかなぁ。でも、まあ別に関係ないけど。
「……ていうか、講義に出たいのですがねぇ」
気持ちよさそうに寝ている琉依の頭を叩いた。
今度はさっきより強めにネ。

act4　破られた誓い

琉依のせいでずっと枕代わりだった膝は、立ち上がった時すごく痛かった。しかもまともに講義も出れず、大学に来た意味が無い。こんな事なら、家でひたすら泣いていた方が良かったかも。

「夏海ちゃん、帰ろう」

一人歩いていた私の元に、梓が走り寄って来た。小柄で可愛い梓……私もこうだったら、振られたりはしなかったのかなぁ。

梓の頭を撫でながら一緒に歩いていると、

「あっ……」

私よりも梓の方が先に声を出していた。そんな私たちの目の前には会いたくなかった男、賢一がいた。

賢一は私の存在に気がつくと、気まずい感じすら見せずにそのまま私の横を通り過ぎて行った。

思わず振り向いてしまった自分が情けなくなる。賢一はもちろん振り向く素振りも見せない。見せた所で彼に何を求めるのか。やり直そうって頼む？　そんな惨めな事できるわけがない。

「夏海ちゃん……」

虚しく立ち尽くす自分に、梓が心配そうに声を掛けてくる。

そんな梓に伊織と帰るよう詫びると、そのまま一人歩いていった。

――――

「昨日の今日だぞ～！　少しくらい動揺した素振り見せろよぉっ」

気がつけば、昨日と同じバーで飲んでいた。

酒は控えようと今朝決めたばかりなのに、その誓いは一日も持た

ず破られた。持っていたグラスの中身は既に空っぽ。
「ナオトぉ！　おかわりぃ！」
空のグラスをバーテンのナオトに渡す。ナオト＝尚人は琉依の兄であり、もちろん彼も私の幼馴染み。そんなナオトが経営するこのバーは私たちの溜まり場でもある。
「なっちゃん、飲みすぎだよ。昨夜も飲んでたじゃないか。今日はもう帰りな」
ナオトは私からグラスを取り上げると、代わりに水を差し出した。ナオトが止めるほど飲んでいたのに、全く酔ってなかった……酔えなかった。今すぐさっきの賢一の顔を忘れたかったのに。お酒を飲む事でしか忘れられないこの情けない自分にも愛想が尽きる。
「いいっ！　ナオトがくれないなら自分で淹れるから」
ナオトの側にあるボトルを取り上げ、水を捨てたグラスに注ごうとした私の手を誰かが掴んできた。
「飲みすぎだよ、槻岡夏海さん」
声の主は、パンストの彼！　これで3度目の遭遇だわ。
「よく会いますね～。蓮子から聞いたよ～、同じ大学なんだってね」
自分の腕を掴む彼の手を払い除けると、お酒をなみなみと注いだ。
「で、何かと会いますがまだ私に何か用があるのでしょうか？」
一気にグラスのお酒を飲み干して彼の方を見ると、彼はただ黙って座っているだけ。
「つまらない男ね。まるで人形みたい」
ツンっと指先で彼の頭を突いた。そして、再びグラスにお酒を注ぐ。
すると彼は私の注いだお酒を取り上げると、そのまま一気に飲み干した。あまりにも突然の行為に驚きはしたものの、すぐにご機嫌になり、
「あら、いい飲みっぷりじゃん。ほら飲んで飲んで～」
再びグラスにお酒を注ぎ、その度に彼は飲み干していく。徐々に

私の気分も良くなっていく。
「ホント、よく飲むねぇ」
空になったボトルを彼に見せ付けた。そして、もう1本と物色していた時、やっと彼の重い口が開いた。
「飲む事で寂しさを紛らわせるのは、反って惨めになるだけだから……」
彼の言葉に、ボトルを探す手が止まる。確かにそう、飲んで泣いて飲んで泣いてを繰り返すだけ。それが惨めなだけというのは自分でも分かっている。
「分かっているけど、惨めだって分かってる！　けど、他に方法がないんだもん。どうしたらいいの？　お酒を飲む事以外でアイツを忘れられるにはどうしたら……」
小刻みに肩を震わせながら言った。
「だからと言って、酒に頼るのは……」
「わかったような事言わないでよ！　何よ、1回ヤッたくらいで彼氏ヅラしないで！」
わかってる。彼は少しも悪くない。むしろ心配してくれているのだから、感謝するべきなのだ。それなのに私の口から出る言葉は、その意思とは反するものばかり。
でも、どうする事も出来ないの。大きく開いてしまった心の中の空洞は自分ではもう修復できない。
「好きだった……愛してた。いっぱい、いっぱい愛してた！」
飲んだお酒みたいに大量の涙が流れてくる。助けてよ、こんな惨めな私を助けて……。
ただ泣いていた私の側に、覚えのある香りが漂ってきた。落ち着ける私の好きなこの香り。その香りの主は、私の頭に優しく触れてきた。
「琉依ぃ」

いつの間にかやって来た琉依の姿を見た途端、さらに気が緩んでしまった私は琉依にしがみ付いた。琉依はそんな私をいつもの様に優しく包んでくれる。

「兄貴、悪かったな」

琉依はナオトに呼ばれたんだ。ナオトにも心配かけさせるなんて。

「それと、えっと……」

琉依が私を抱き上げた後、彼に何か言っているが意識が遠のいてしまいそれを聞く事も出来なかった。

ａｃｔ５　朝、目が覚めると……２（前書き）

○月×日
自分で作った誓いを早速破り、パンストの彼と浴びるように酒を飲む。あぁ・・・惨めだわと思いながらも、そうする事でしか自分を慰められない自分の不器用さに情けなくなってくる。

act5　朝、目が覚めると……2

目が覚めると、そこは見覚えのある部屋。隣りには、この部屋の主である琉依が手を繋いだまま寝ていた。

昨夜の事は覚えている。あれだけ飲んだのに、本当に酔えなかったんだ。ただたくさん飲んで、醜態をさらしてはみんなに迷惑を掛けただけ。

「参った。これじゃあ本当に惨めなだけだわ」

今更ながら、自分の情けなさを思い知ってしまう。

琉依にも迷惑をかけてしまった。いくら幼馴染みでも頼りすぎている。これじゃあダメだって事は分かっているけれど、今の私には支えてくれる人がいないと辛い。

そう思いながら、寝ている琉依の髪に触れた時ゆっくりと琉依の目が開いた。

「おはよん」

そのまま琉依はベッドから降りると、階下へ行ってコーヒーの用意を始めた。

「ごめんね」

戻ってきた琉依に対して私は謝ると、琉依は反応する事も無くコーヒーカップを私に差し出す。

『ごめんね』

この言葉を私は今まで何回言ってきたのか。琉依はそのまま私の隣りに座ってくる。

「夏海は、嫌な事があったらすぐに怒鳴り散らすけど、俺が一緒に寝たら翌朝必ず1番に謝ってくるんだ」

仰るとおり。痛いほど、琉依は私の事を分かっている。

「大丈夫、わかっているよ。夏海は不器用なだけなんだって事くらい」
そう言うと、琉依は優しく私の頭を撫でる。
ありがとう。琉依は、今の私には1番必要な存在かもしれない。

「兄貴も心配してたから、後で電話してねん」
琉依の言葉に、ただ頷くだけだった。
「あと……浅井尚弥君にも」
うん、うん……うん？
「浅井尚弥？　誰それ」
寄りかかっていた琉依の体から離れて、琉依の顔を見上げた。
「蓮子曰く、パンストの彼？　彼も心配していましたよ」
あぁ、彼にも悪い事したなぁ。
彼は全く関係ないのに、酒をガバガバ飲ませるだけ飲ませた挙句に当り散らすなんて……最悪を通り越していますよ。と、言うか
「何で琉依がパンストの彼の名前を知っているのよ？」
「パンスト、パンストって。昨夜、迎えに行った時に聞いたんだよ」
琉依は苦笑いをしながら答えた。
浅井……尚弥。次に会ったら、聞きたかった名前。

“飲む事で寂しさを紛らわせるのは、反って惨めなだけ”

昨夜こぼした彼の言葉が頭から離れない。
「夏海？」
琉依が顔を覗いて来る。私は顔を琉依の胸に埋め、ぐいぐいと頭を動かした。
「な～に甘えているんですか？　子供みたいですよ」
琉依はそう言うと、煙草に火をつけた。でも、それ以上は何も聞かない。ホント、あんたは私の事をよく知ってるね。

大学へ行って、ちゃんと浅井クンにも謝らないと。
琉依から離れ、ベッドから降りてクローゼットから服を取り出した。しょっちゅう琉依の家に泊まるから、何着か服を置いているのだ。
「て言うか、今度こそお酒を飲むのはやめよう！」
改めて、誓いを立てた。失恋をお酒で忘れるのは自分が惨めになるだけだから。
「そうだね。夏海ならすぐに立ち直れるよ」
琉依は私の頭をポンポンと優しく叩き、そのまま顔を近付けてきたかと思うとキスをしてきた。
「琉依～！」
琉依の頬を抓ると、琉依は痛そうな顔をしながらも
「昔から、こうしてキスしたら夏海元気になってたし～」

そう言われたら、何も言えなくなるじゃない。確かに、私は小さな頃から元気がない時に琉依がキスをしてくれると、不思議と笑顔になり元気になっていたから。
「ていうか、今も通用するとは思いませんでしたが……」
琉依は笑っていた。
本当に琉依には感謝している。いつも助けてもらってばかり。もし、琉依がいなくなったらどうなるのか。
そう思いながらジーッと琉依を見上げていたら、琉依はケラケラと笑うと、
「大人になったら、1回じゃ物足りないのかな？」
と、再び顔を近付けて来たので、私は琉依の額をバチンと叩いた。
ふざけた行為だと思うが、私はだいぶ癒されたと感じていた。これが、琉依なりの癒し方なのだ。
「さて、大学に行きますか？」
私は車のキーを持ち出し琉依に渡すと、琉依の家を後にした。

ａｃｔ６　パンストの彼の正体（前書き）

○月△日

昨夜、また琉依に助けられた私。目が覚めると昨夜の事で反省ばかり・・・。いくら幼馴染みとはいえ、少し頼りすぎている。そろそろ“琉依離れ”しないといけない！（できるのか・・・）

act6　パンストの彼の正体

「おはよ～」

琉依と教室に入ると、すでに蓮子と梓が待っていた。
梓は私の方に駆け寄ってくると、ギュッと抱きついてきた。
「あ、梓？」
ただ驚く私と琉依だったが、それでも梓は私から離れようとはしなかった。
あぁ、昨日の賢一の一件か。梓も一緒にいたから、私が落ち込んでいると思ったのかしら。まぁ、落ち込んだのは合っているけれど。
挙句にはお酒に頼る始末だったし。
「大丈夫だよ、梓。私はもう大丈夫だから」
私の言葉に梓が見上げてくる。ホント、可愛いなぁ……そう思っていると、琉依が私から無理やり梓を引き離して今度は自分が梓に抱きついた。

「可愛いなぁ、梓は。でも抱き付く相手を間違っているでしょ？」
「きゃーっ！　きゃーっ！」
強く抱き締める琉依から離れようと、梓は必死にもがいていた。
そんな梓を助けようと、手を差しのべようとした時だった。
「うぉらぁぁっ！　俺の梓に何してんだーっ」
怒鳴り声と同時に、琉依の頭を殴る伊織の姿があった。
殴られた拍子で梓が琉依から離れると、伊織は梓を抱き締めた。
「も～！　かわいそうな梓！　怖かったでしょう？」
琉依を殴った時は完全に“男”だった伊織だが、再び元の“オカマ”に戻っていた。
「梓～」

「梓に触らないでちょうだい！　妊娠したらどうしてくれるのよ！」
しつこく梓に抱きつこうとした琉依を、伊織が叱咤した。抱きついただけで妊娠なんかする訳がないのにと思ったが、相手は琉依。女遊びのひどい琉依だからなぁ、そう言われても仕方が無いか。
「そうそう、忘れるとこだったよ。夏海、この間のパンストの彼！　彼の正体がわかったのよ」
出た、パンストの彼！　正体って今朝、琉依から聞いたよ。浅井尚弥って名前だってことくらい。
話が長くなりそうだったので、私達はまた講義をサボる結果になった。

それから私達は、遅刻してきた渉と合流して喫茶店で先程の話の続きを始める事にした。
「……で、正体って？　例のパンストの彼の名前ならもう知っているけど」
流石に少々うんざりした顔で蓮子の方を見ながら話す。
「あの“パンストの彼”もとい、浅井尚弥って実はとんでもない人物だったのよ！」
蓮子の言葉に、思わず興味を抱き始めてしまった。そんな私同様、他の皆も視線を蓮子に向けていた。
「何よ、とんでもないって。とんでもない悪人って事？」
「そんなまさか！　この世に琉依以上の悪人がいるかよ！」
「そうよねぇ、全世界の女性の敵ですもの。超えたくても、なかなか超えられる壁じゃないわよねぇ！」
伊織と渉が笑いながら話をしているのを、琉依もまた悪びれる事も否定する事もなく笑っていた。
「話がそれている！　蓮子！　続き！」
ケラケラ笑っている男どもを睨みつけると、蓮子に話の続きを促

した。
「そ、そうそう。それで、あの浅井尚弥って男はね……」
蓮子の言葉1つ1つに思わず息を飲んでしまう。
「彼、現在は文学部の国文学科にごく普通の成績で在籍しているけど、実は入学試験をトップの成績でパスしているのよ！　しかも、うちの医学部と理工学部にも受験していて、両方ともまたトップの成績だったって」
はっ？　何ですって？　蓮子の言葉に、全員が言葉を失っていた。でも、医学部のトップは確か……

「梓だったよなぁ」
全員が梓の方を見ていた。医学部に在籍している梓は、この大学全体のトップだと言っても過言ではないくらい成績優秀なのだが。
「あっ、でも話は聞いた事あるよ。“表の倉田・影の浅井”って。あぁ、これの事だったんだぁ」
梓は思い出したかの様に、言葉を発した。
「梓がトップになったのは、彼が医学部と理工学部をケッたからなのよね」
まぁ、もったいない。私は彼がなぜそんな行動に出たのか、理解に悩んだ。天才も限界まで行き着くと、バカな行為に出てしまうのかしら。
「あらぁ、意外よね。私達以外にトップクラスの才能を持った人間がいるなんて」
伊織が鏡で自分の顔を見ながら呟いた。
確かに、ここにいる6人は各学部でトップクラスの成績を残しているが。

芸術学部の伊織、社会学部の蓮子、医学部の梓、体育学部の渉、そして国際学部の琉依と私（自分で言っていいのか）
「ふ～ん、まぁ俺には関係ないけど？　あぁそうだ、俺ちょっと

事務所に行って来る。用事を忘れるところだったよ」
琉依はそう言うと早々と席を立ち、その場から去っていった。
琉依はあぁ言ったが、私は少しだけど彼に興味を抱き始めた。理解に苦しむ彼の行動の真意を確かめたいとさえ思ったのだ。

ａｃｔ７　今晩おヒマ？（前書き）

○月△日
パンストの彼＝浅井尚弥の正体は、医学部と理工学部をトップで合格した秀才クンだった。けれど、何の迷いも無くその２つを辞退してしまった彼。そんな彼に少しずつ興味を抱き始めた……。

act7　今晩おヒマ？

「それにしても……蓮子、どうして彼の事知っていたのよ？」
今更ながら、素朴な疑問を蓮子にぶつけた。その問いに蓮子は目を細め、妖しい笑みを浮かべた。
「“私”よ？　どれだけの情報源がいると思っているのよ」
聞いた私がバカだった……。そう、蓮子だから知り得た事かもしれない。さすがは蓮子サン……。
「そういえば……琉依は？」
梓の問いに、琉依がいなかった事を思い出した。
「確か、事務所に用があるって途中で席を立ったわねぇ」
急にどうしたのかな……琉依。いつもの琉依からは考えられないくらい真剣な顔をしていた。事務所に用だなんて、一体何があったのかしら。
「あっ、琉依よ」
伊織の言葉に俯いていた顔を上げると、向こう側から琉依が髪を触りながら歩いて来た。

「あれ、話終わっ……」
琉依が言い終わるのを待たずに、私は琉依に駆け寄って胸元に飛び込んだ。
「夏海？」
琉依が覗き込んできたが、私はそのまま琉依に抱き付いていた。
「あら、夏海ったら、琉依がちょっといなくなったからって寂しかったのかしら？可愛いわねぇ」
伊織の言葉に少し驚きながらも、琉依は私の頭を優しく叩くと
「へぇ……俺はちょっとでも夏海から離れたら、こうやってハグしてくれるんだ～。役得、役得」
そう言って抱き締めてくれるが、今の琉依はいつもと様子が違っ

ていた。
「琉依……？」
「少し……このままでいて」
琉依の顔を窺うと、さっきまで笑っていた琉依の顔は暗く沈んでいた。そんな琉依を見て、私はほんのわずかだが不安を覚え始めた。
「……み？」
こんな琉依、見た事ない……。
「……つみ？」
何かあったらいつも話してくれていたのに。まだ何も聞いていない。
「夏海！」
琉依の呼び掛けで我に返った。
「もう、離れてくれてもいいんだけれど？」
すでに琉依は私を自由にしていたが、私はずっと琉依にしがみ付いていた。
「お、おぉっそうデスか！　失礼しました！」
あわてて琉依から離れようとしたが、再び琉依が背中に腕を回してきた。ん……？
「そう、気が遠くなるほど夏海チャンは俺の事が好きだったのね……」
ごめん、ごめんと琉依は抱き締めてきたかと思うと、そのまま私を抱き上げた。……やっぱりいつもの琉依だわ。
「あら、よかったじゃない夏海。新しい彼氏が出来たじゃないの」
伊織は微笑ましく私に告げた。
「冗談じゃないわよ！　こんなのが彼氏になったら、すぐに妊娠しちゃうじゃない！」
全く……普段見せない表情なんかして、少しでも心配して損したわ。
けれど、少し芽生えていた私の不安……これが近い内に現実とな

るなんて、今の私には想像すら出来なかった。

それから私達はそれぞれ講義を受けに戻っていった。とは言っても、私と琉依は一緒だが。

一生懸命講義内容を頭に入れていく私の隣では、琉依が気持ちよさそうに眠っていた。いくらトップの成績を持っているからって、こんな風に寝てばかりいると成績も落ちるのに……。

そんな事、言うだけ無駄である。琉依が興味あるのは遊びだけって事は充分わかっていたから……。それに、こう怠けてばかりいても不思議と彼のトップの座が揺らぐ事はなかった。それもまぁ、天才の一言で片付けられるのでしょうが……。

「だけど、講義が終わるごとに起こす私の身にもなって下さいよ！」

眠っている琉依に呟いたが、それで起きるほど浅い眠りではない。だから私はいつも……

「それじゃあ、今日はここまで」

ガツンッ！！

教授の言葉と同時に、琉依の頭を殴る……これがいつもの起こし方である。

「るーい！　起きなよ、これから伊織の用事に付き合う約束したんでしょ？」

琉依の荷物も一緒に持って、まだ眠たげな琉依に声をかけた。

「やだ、琉依ったらまた寝てたの？　仕方の無い子ね」

待ち合わせの場所になかなか現れない琉依にしびれを切らしたのか、伊織がわざわざ国際学部までやってきた。そのまま琉依と伊織と別れ、外に出た時だった。

「あっ……」

私の目の前を、パンストの……もとい浅井尚弥クンが通り過ぎていった。

「ねぇ！」

私の呼び掛けに、彼は立ち止まり振り向いた。
「あぁ、槻岡サン。体調はどう？」
昨夜、飲み過ぎていたのを気遣っての事か……お優しい事。
「えぇ、大丈夫よ」
「そう、それは良かった。じゃあね」
彼は笑って答えると、再び帰り道へと足を向けた。違う……そうじゃなくて、昨日の謝罪をしないといけないのに。
「あの……！」
私の発した言葉に、彼は足を止めると再びこちらを振り返った。
「今夜……ヒマ？」
……何を言っているんだ、私の口は。

ａｃｔ８　好きｏｒ嫌い？（前書き）

○月△日
突然席を立った琉依の様子がいつもと違う……。今までずっと近くにいたのに、今日は物凄く遠く感じた。私のそばから離れていく……そんな心配をしていた私の前に現れた浅井尚弥クン。今晩おヒマ？

act8　好きｏｒ嫌い？

放課後、浅井尚弥クンをナンパ（？）した私は、そのまま2人でナオトの店へ行った。もちろん、私はお酒を飲まない事を誓ったのでジュースをオーダーした。

「なっちゃんがお酒を飲まないなら、うちの売り上げも落ちちゃうよー」

ふざけて言ったナオトに向かって、私はタオルを投げつけた。

「昨日はごめんなさいね。あなたは何も悪くはないのに、当り散らしたりして……。見苦しいったら無いわ」

ナオトから出されたジュースの入ったグラスを彼のグラスに軽く当てると、渇いた喉に流し入れた。やはり何か物足りない感じがするが、これも自分が立てた誓いの為だ。

「ナオトもごめんね。店の中で散々喚いたりして」

手を合わせて詫びると、ナオトは優しく笑いながら頷いていた。

「別に、俺も気にしていないよ。それに、俺も言い過ぎたしね」

言い過ぎたって、そんな事無いのだけど……。

そうそう、せっかくこうして会ったのだから、気になっていた“あれ”を聞いてみようかな。

「ねぇ、ちょっと聞きたい事があるんだけど、うちの医学部と理工学部を受験したのに辞退したってホント？」

それを聞いた彼の手が止まった。聞いたらまずかったかなぁと、少し後悔したが聞いてしまったからには仕方の無い事だ。

彼は持っていたグラスを置くと、少しの沈黙の後にその重い口を開き始めた。

「うん、その通りですよ。確かに医学部と理工学部と文学部を受験して、全て合格したけど医学部と理工学部は辞退しましたよ」

淡々と話す彼の表情は何処と無く冷めていた。

「せっかく合格したのに、どうして辞退なんかしたの？」
「どうしてって、俺はもともと文学部しか受験する気無かったんだ。けれど、高校の担任や親が受けろってしつこいから……。結局は辞退する羽目になるのにね」
少し、彼の口から笑みが零れたがやはり冷めた感じは残っていた。

「せっかく、トップになるほど優秀なんだから、やりがいを感じる位のチャンスも巡ってくるじゃない」
「んー……。興味ないね」
私の言葉に少し考えながらも、彼は完全に否定した。医学部と理工学部をトップでパスしたのに、辞退した理由を“興味ないね”の一言で片付けるなんて……。想像以上の彼の人間性に、私はさらに興味を抱いていた。
「何も興味がないの？それなら、私の友達と話をしてみない？少しずつ何かに興味を持ち始めるのも悪くないんじゃないかな」
何に対しても興味がない彼に同情したわけではないが、ついそんな事を口に出してしまっていた。

「興味ならあるよ……一つだけだけど」
残っていたお酒を飲み干すと、彼は俯いてつぶやいた。
「えっ？　あるんだ！　何、何？」
そう振り向いた時、さっきまで俯いていたはずの彼の視線がこちらを見ていた。
「ん？」
「うん？」
私の問いに、彼もまた同じような言葉を返すだけだった。“何に興味があるの”という問いに対しての彼の視線……。これはどう受け取ったらいいのか。そう考えている私をよそに、彼は構うことなく私を見ていた。何て言ったらいいのか……。

“ごめんなさい、まだ次の恋に踏み出せないの”
……自意識過剰にも程がある。
“そう！　それはありがとう”
……これも何と言うか。

それでも彼は目を反らさない。どんなリアクションを期待しているの？私に何て答えて欲しいのか……。
好き　ｏｒ　嫌い？
まさかね。悩みぬいた末に、私は彼の方を見てニッコリ微笑むとすぐにナオトに視線を変えて叫んだ。
「ナオトーおかわり！」

……ホント、すいません。どう対処したらいいのか、わからないのです。

……好き　ｏｒ　嫌い？……

ａｃｔ９　新メンバー加入！（前書き）

△月×日
以前浅井尚弥クンとまた飲みに行った時（私はもちろんジュース！）、彼に何か興味があるかと尋ねたら、何故かこっちを見ていた。
どう捉えたらいいのか分からなかった私はただ、沈黙を続けたままだったけど、あれから何日も経った今でもそれが頭から離れられない！それなら、どういう意味か聞いておけば良かった。（時、既に遅し）

act9　新メンバー加入！

「と、言う訳で噂の浅井尚弥君を連れてきました～」
この間店で彼と話した後、みんなに彼の話をした。そして今日、渉の家に集まるのでその場に彼を連れて行くことにしたのだ。
同情ではなく、彼に何か興味を持ち始めて欲しいという気持ちから起こした私の行動……。それでも先日の彼の視線が気になって仕方が無い。
忘れようと思っても忘れられない。
気になるけど、聞く事も出来ない。
「夏海？」
伊織が肩を叩いてきた。
「と、とりあえずみんな、簡単な自己紹介をしてくれるかな？」
今時、小学生じゃあるまいし自己紹介なんて……と思うが、初対面なのでまずは形式だけでも……ね？

「じゃあ、俺から。体育学部の一ノ瀬渉！　よろしく」
「社会学部の萩原蓮子よ。夜遊びが大好き、あとイイ男も大好きよ」
そう言うと、蓮子は指で軽く彼の顎を上げた。また、蓮子の悪いクセが出た。

「医学部の倉田梓です。えっと、趣味は花を生けることです……よろしくお願いします」
少し照れくさそうにしながらも自己紹介する梓を、彼はかわいい小動物を見るような目で見ていた。これは私も予想していた。小柄な梓は女の私から見ても本当に可愛いのだ。たいていの男たちも、そんな風に思うのも無理はない。
しかし、そんな男たちの視線から梓がこうして無事でいられるの

も……。
「芸術学部の東條伊織よ。よろしくね。それと……」
伊織は女性らしい仕草でニッコリ笑いながら彼に自己紹介をしていたが、それは徐々に“男”の表情へと戻り、話を続けた。
「この倉田梓は俺の彼女だから、手を出したら……殺すぞ」
伊織のギャップの激しさに、思わず彼も驚き頷いていた。

「文学部の浅井尚弥です。よろしく。みんな、それぞれのトップで有名人だから何となく知っていました」
あんたの方がすごいだろ……。多分、全員が思っているに違いない。

「あれ？　琉依は？」
渉の言葉で琉依がまだ来ていない事を思い出した。
「遅れるって連絡あったわよ。もう、来るんじゃないかしら」
伊織が梓の髪を結いながら答えた。
彼に琉依の事を言おうとしたが、渉や蓮子と話をしていたので琉依が来るのを待つ事にした。
彼が笑って渉達と話をしているのを見ると、何かに興味を……という私の“作戦”は成功したと言ってもいいのだろうか？　まぁ、ただの自己満足に過ぎないのだけれど。

「おー！　邪魔するよ」
やっと琉依が部屋に入ってきた。そして彼の姿を確認すると、近くまで行ってニッコリ笑いながら、
「宇佐美琉依です。この間、バーで会ったよね。あれ、兄貴の店なんだ。これからよろしく」
手を出して、軽く彼と握手をした琉依は変わらず笑顔だった。
“これからよろしく”

この言葉はどこにかかっているのか……。琉依自身？　それとも、ナオトのお店のこと？

「夏海？　何ボーっとしてるの」

琉依の言葉に疑問を抱いていたら、渉が声を掛けてきた。

「ちょっと考え事していましたよ！」

「何？　俺の事？」

ちょっとでも考え事していたら、必ず自分の事だと言い切る琉依に呆れていたが、その通りだから何も言えなかった。

「二人って、付き合ってるの？」

「そう見える？　夏海、やっぱり俺達恋人同士に見えるみたい」

「冗談じゃないわよ！　琉依！　いい加減にしなさいよ。あと、あなたも一番したらいけない勘違いよ！」

調子に乗る琉依に怒鳴りつけると、彼にも注意をした。しかし、彼は私の答えに納得していないのか、微妙な表情を見せていた。これも先日の私への視線同様、どう捉えたらいいのかわからなかった。

全員が揃って、いつものように話をしている私たちの中に今日から新しいメンバーが入った。

とても頭が良くて、とても親切で、とても……不思議な存在の彼＝浅井尚弥。

そして……賢一と別れたばかりなのに、私の心は何故か微妙に動き始めている……。

これは何の始まり？

（ていうか、琉依と彼がいつの間にか消えてるし！）

ａｃｔ１０尚弥ＶＳ琉依（前書き）

今回の話は、前回の最後でいなくなった尚弥と琉依が一体何をしていたのかを書いていますので、尚弥視点で書いています。

act10尚弥VS琉依

「ちょっと……いいかな？」
簡単な挨拶を済ませて少し話をした後、彼＝宇佐美琉依に声を掛けた。
「ここでは、無理な話？」
先程、挨拶をした時と変わらない笑顔で彼は小声で尋ねてきた。
しかし、俺が答える前に彼は立ち上がると、
「渉！　部屋を一室借りるぞ」
家の主、一ノ瀬の了承を得ると、俺を手招きして案内してくれた。

「で、俺に何の話かな？」
他の人に聞かれたくない内容だというのは、部屋を借りた時点で分かっているくせに……と思ったが、呼び出したのは自分なのでこれは答えるべき事なのだ。
「槻岡夏海サンの事だと言ったら分かるかな」
遠回しな俺の発言に彼は、
「あぁ……」
と、何かを察したかの様に呟いたが、
「さぁ？　何の事かな？」
さっきまでの笑顔とは違って、怪しげな笑みを浮かべて答えてきた。
本当は知っているが全てを俺に話させようとする彼を、手強い相手だとさえ感じた。
「さっきも聞いたけど、本当に槻岡サンと付き合ってない？」
彼女に対して、恋愛感情を持っているわけじゃない。だが、今まで何に対しても興味すら抱いた事が無かった俺が初めて興味を抱いた存在なのは確かだ。そんな彼女の事を少しでも知る事が出来たら

……。
しかし、さっきの彼女と答えと同じ反応を待っていたのに、彼が出したのはただの沈黙だった。何も言わず、ただ笑みを浮かべて黙っているだけだった。
これはどう捉えたらいいのか？　肯定しているのか、否定しているのか。
“彼の片想い？”
“彼女の片想い？”
“やっぱり、付き合ってました？”
そう勝手に三択を考えていても、彼は変わらず沈黙を守ったままだった。
「じゃあ、質問を変えるよ。二人の関係って？」
「さっきの質問とあまり内容変わってないし！」
やっと口を開いたかと思ったら、俺の質問へのダメ出しだった。
「何？　浅井クンは夏海の事が好きなの？」
質問を質問で返された。どうしても、俺の質問には答えたくないらしい。
「別に……好きだという訳じゃないけど」
そんな俺の返答を聞いた途端、彼は再び笑顔に戻ると、
「なら、答える必要はないよね？」
恋愛感情があるかどうかは別として、彼女達はよくこんな手強い彼と一緒にいられるな……改めて彼女達に感心してしまう。
「恋愛感情は無いけれど、彼女に興味を抱いたんだ。彼女の事を知りたいと思ったんだ」
なぜ、彼女じゃなく彼にこんな事を打ち明けているのか、だんだ

んわからなくなってきた。
「へぇ……夏海にねぇ」
わざとらしく答える彼に、わずかだが苛立ちさえも覚えてくる。
「夏海とは幼馴染みなんだ。夏海の両親が共働きでね、うちによく預けられていたんだよ」
突然、彼が話し始めた。もう、答えは返って来ないと思っていた俺は、思わず顔を上げた。
「同じ年だけど、姉のような存在だったり、妹のような存在でもあったり……」
淡々と話してはいるが、俺の質問の答えにはなっていない。
「幼馴染み……。それだけ？」
彼女と一緒に飲んだ夜、彼の兄に呼ばれた彼が血相を変えてやって来たのを俺は見てしまった。俺に詫びてはいたが、そんな彼の表情は決して穏やかではなく、むしろ……敵意さえ感じた。
「幼馴染みとかは君にとってはどうでもいい話なんだよね。でも、俺が答えられるのはここまでなんだ」
彼はそう答えると、また沈黙を続けた。彼が意地でも沈黙を通し続けるのは、彼女の事を思っての事なのか。
「じゃあ、話はこれで終わり！」
まったく納得する事もないまま、話は完結を迎える事になった。部屋を出てみんながいるリビングへ戻ると、彼はそのまま彼女の元へ向かう。今までのやり取りが無かったかの様にふるまう彼。そして、一緒にいる彼女はこちらを見ることも無く、彼に笑いかける。
そんな彼女の笑顔を、自分にも見せて欲しいと思ったこの感情は何の始まり？

ａｃｔ１０尚弥ＶＳ琉依（後書き）

第１０話を迎えました。作品を読んで頂き、本当にありがとうございます！　シリーズ第１弾も中盤を迎えました。最後までどうぞよろしくお願い致します。

act11忘れられない……

「この前、渉の部屋で彼と何を話していたのよ」
彼を琉依達に紹介した日から数日後、ずっと気になっていた事を運転している琉依に尋ねた。しかし、琉依は笑って黙っていた。
「秘密の多い男だね、琉依は」
少し嫌味を込めて告げたはずなのに、琉依はそれでも変わらず笑顔のまま。
「夏海が気にするような話じゃないよ。気にしないで、今日のデートを楽しみましょうよ」

そう、今日は前々から約束していた琉依とのショッピング。賢一に振られた時、落ち込んでばかりいた私に琉依が誘ってくれた。
「心配しなくても、彼とは付き合わないよ。夏海チャンはヤキモチ焼きなんだから」
「何、バカな事言ってんのよ！　ほら、安全運転しなさい！」
左手でハンドルを操り、右手を私の肩に回してからかってくる琉依を叱咤すると、琉依の右手を強くつねった。

「さて、どこに行きます？　何が欲しいの？」
ハンドルを操る琉依の頭からは既に、先程の話題など綺麗に消え去ってしまっているのだろう。自分にとって、必要の無い事はすぐに忘れてしまうのが琉依の特技である。
「服や雑貨店を見回って、それから……おいしいものが食べたいなぁ」
「了解！　この辺においしいイタリアンの店があるから、そこへ行こうか！」
さすがは琉依……。毎日のように遊びに行くだけあって、女性が好きそうなお店をしっかり把握しているわ。改めて、感心してしま

いますよ。
車を止めて、様々な店が立ち並ぶ通りを二人で歩き始めた。自分がいいと思った店を見つけると、入って商品を眺める。自分に似合っているかどうか琉依に見てもらったり……。
「いやぁ、買った買った！　久しぶりだから、ついお財布も緩くなるなる」
けれど、何点かは琉依に買ってもらったり……。
「お腹も空いたし、ご飯を食べにいこうよ～」
琉依の手を握って、上機嫌のまま食事に行こうとした。しかし、琉依は何故か真剣な顔をして、その場を動こうとしなかった。
「……琉依？」
「あ、悪い！　よし、行きましょうか。でもあっちからの方が近道だから、そこから行きましょう！」
さっきまでと違って、急に不自然な態度を示す琉依を不思議に思った。
「何言ってるの！　イタリアンの店ならこっちからの方が……」
あぁ……、琉依がこちらに行こうとしない訳がやっと理解できた。隣りでは、琉依が顔に手をやっていた。今更ながら、琉依の言うとおりにしておけば良かったと後悔してしまう。
私の視線の先に映ったのは、可愛い女の子と楽しげに笑いながらショッピングをしている賢一の姿であった。
「夏海……」
私の肩に手を置くと、そのまま琉依は私を連れてその場を離れた。
「やっぱり、他に女がいたか！　いやぁ……参りましたよ」
何とか琉依の前では涙を見せない様にしているけれど、結構辛い……。我慢しすぎて、肩が震えてくる。
「別れてから、もう何日も経っているから忘れる事ができたかな

ぁと思っていたのに、やっぱりまだ……」

好き……。

言葉にならなかったのは、とうとう我慢できずに涙が流れてきたからである。

「見たくなかったなぁ……」

琉依が近付いてきて、私を優しく抱き締めてくれた。

「見なきゃ……良かったなぁ」

そのまま琉依に抱き締められたまま、ためらうことなく涙を流し続けた。

道の真ん中なのに、そんな事に構う事なく……。誰かに見られているかもしれないのに、それでも私は泣くのを止める事は無かった。

やっぱり……まだ忘れられないよ。

そんな私の頭を優しく撫でる琉依……。

道の向こう側で、偶然居合わせた浅井クンが見ているとも知らずに……。

ａｃｔ１２琉依の復讐（前書き）

今回のお話は、また尚弥視点で書いています。

act12琉依の復讐

「いらっしゃい」
昨夜電話で呼び出された俺は、その相手が指定した場所に到着した。
ここは“N・R・N”という名のバー。待ち合わせの相手、宇佐美琉依の兄の店だ。
店では、彼が一人で待っていた。店の主である、彼の兄もいない。
「ナオトから鍵を借りたんだ。ごめんね、急に呼び出したりして」
彼はコーヒーを差し出すと、俺の隣りに座ってきた。

「それで、今日は何の用なのかな？」
彼から呼び出された時、あまりにも意外な出来事だったので、しばらく驚きを隠せなかった。
「う～んとね、せっかくこんなに天気がいいから女の子でもナンパしようかな～って思って」
のん気に話す彼の言葉に、思わずガクッと肩を落とした。呼び出すくらいだから、どんな用事かと思ったらナンパだなんて……。
彼の事は知り合う前から、“夜遊びの帝王”等の異名で有名だったので知っていた。だが、ここまでひどいとは思わなかったな。彼女との関係も曖昧なままだったし、こうして女癖の悪い所を見ると彼女が気の毒になってくる。
「あの……そんな用なら、俺帰り……わっ」
最後まで言い終わる事も無く、俺は彼に無理やり外に連れ出され、そのまま彼の車に乗せられた。
「ちょっと、俺は行くなんて一言も……」
だが、そんな俺の事など構う事無く運転していた。しかし、運転している彼の表情はさっきまでの明るさは無くどこか暗かった。そんな彼に俺は何も言えないでいた。

「さぁ！　着きましたよ！」
彼が案内したのは、某有名女子大だった。ここで、彼曰くナンパをするのか……。
彼は門の近くに立って、好みの子を待っているのかとても真剣な目つきをしていた。しかし、さっきから何人も結構可愛い女の子は通るが、彼は見向きもしなかった。そんな彼の事を、逆に女の子たちが見ていた。
確かに、彼は同じ男の俺から見ても綺麗な顔立ちをしているので、女の子が振り向くのも無理はない。

すると、しばらくして彼の表情が変わった。好みの子を見つけたのか、俺に手招きをしてきた。彼に誘われるまま、俺たちはその女の子に近付いた。
「ねぇ、君可愛いね。これから一緒に遊びに行かない？」
綺麗な顔立ちの彼に誘われて気を良くしたのか、女の子もまんざらではなさそうだった。
「えっ！　もしかして、あの有名な宇佐美クン？」
さすがは宇佐美琉依……。自分が通う大学からずいぶん離れているこの大学でも、その名は有名なのだ。
「そうそう！　あら、俺って有名じゃん！　こっちは俺の友達の尚弥クン、よろしくね」
いつの間にか紹介されていた俺は、思わずその子に軽く頭を下げた。
「こんにちは。石川真子です」
長い茶髪を触りながら、彼女は挨拶をした。そして、彼が彼女の肩に手をやり俺も一緒に車へ向かおうとしたその時だった。
「真子！　お前何やってんだよ！」
振り返った先には、荒い息遣いをした自分と同年齢くらいの男が

立っていた。
「真子チャンは、俺達と今からデートするんですよ」
彼は男を挑発しているのか、彼女の肩を引き寄せた。
「お前……、宇佐美じゃないか」
色々な女の子と遊ぶから、さすがに彼女たちの彼氏からも有名……ブラックリストに載っているんだな、この宇佐美という男は。
「ふざけんなよ！　真子！　お前、自分が誰といるかわかってんのか？」
この男にとっては、俺は眼中に無いのかちっとも話に触れる事が無かった。
「て、言うかぁ……つまんないんだよね。全然刺激が無いって言うの？　もうちょっと刺激がある付き合いがしたいの！　賢一にはそれが期待出来ないし～」
賢一……？　どこかで聞いたような。
「そんなにつまんない男なんだ。それに比べたら俺って最高ですよ！　毎日が刺激ばかりで」
そのまま車に乗ろうとしたが、男がそれを阻む。
「真子！　俺はお前を愛しているから、あんな……あんなつまらない女と別れたんだよ！」
うわっ……。こんな公衆の面前で“愛している”なんて叫ぶから、注目の的になっているよ……。彼女も恥ずかしそうにしているし、彼も……していない。むしろ、遊び人の顔からいつの間にか表情が曇っていた。
「やめてよ！　まるで私のせいで別れましたなんて事言わないでよ！　あんたなんて、そのつまらない女がお似合いなのよ」
二人の男女が修羅場を迎えている中、俺は別にここにいなくてもいいのでは？と思う。
「チッ！　お前みたいな女なんか別れてやる！　せいぜいその野郎にいいように遊ばれたらいいんだよ」
なんか、俺が悪い事をしたみたいに感じて、心が痛くなる。今日、

彼と俺が彼女と会わなければこんな事には……。

自分の彼氏が去って行くにも関わらず、彼女は彼に夢中だった……。

ａｃｔ１２琉依の復讐（後書き）

いつも読んで頂きありがとうございます！次回も尚弥視点で書きます。感想等お待ちしております。

act13琉依の復讐2

「ちょっと、先に車に乗っていてくれる？　軽く用事を済ませて来るから」
そう言って彼は彼女を車に乗せると、男の後を追いかけていった。

「アンタの彼女を取ってごめんね」
とでも言うつもりなのか……。次第に速度を上げて走る彼は男に追い付き、肩を掴んだと思いきや……

ガツッ！！

殴られた拍子で、男の体は地面に倒れこんだ。どうして、女を取った男が取られた男を殴るのか……。
「……ってぇ、何するんだよ！」
殴り返そうとした男だったが、一瞬先に彼が男の襟を掴むと自分の方へ引き寄せた。
「いいか？　つまらない女でも、あいつは真剣に心からお前を愛していたんだ。　不器用なりに、お前との愛を大切にしていたんだ。お前みたいな奴を一生懸命愛したあいつの事をつまらない女の一言で片付けるのは、許さない」
彼は男の襟から手を離すと、もう一度男を殴りつけた。勢いよく倒れこんだ男を見る事も無く、彼はこちらへ戻ってきた。

彼の言葉からして、まさかあの男は……。
そう考えていた俺の前を通り過ぎると、彼は車の中で待っている彼女の元へ行き、勢いよくドアを開けた。
「出ろよ」
さっきまでの明るい声とは違い、憎しみの込めた低い声で彼女に

降車を促していた。
「えっ？　どうしたの？」
「いいから、出ろって言ってるだろ！」
今の状況を理解しきれていない彼女を無理やり外に出すと、彼は彼女を軽く突き飛ばした。
「きゃっ！」
声と共に、彼女は軽く転んでいた。
「おいっ！　宇佐美、何するんだ」
彼の行為を見かねて止めに入ったが、その時の彼には俺の制止など無駄であった。彼女を見下ろす彼の表情は、怒りに満ちたものだった。
「ち、ちょっと、何するのよ！？」
地面に座り込んだまま、彼女は彼を見上げた。彼はそんな彼女と同じ目線までしゃがみ込むと、
「お前がつまらない男だと言ったさっきの男……。例えそうだとしても、そんな男の事を真剣に愛した女もいたんだ。そんな女の事もつまらないと言うのは……俺が許さない！」
そう言うと、彼は立ち上がって車の方へ戻っていった。続けて俺が車に乗ったのを確認すると、彼はまだ呆然と座り込んだままの彼女を置いて発車させた。

「さっきの男はもしかして……」
「夏海の元カレ、それと浮気相手」
今日、彼がナンパをしようなんて言ったのはこの為だったのか。
「でも、偶然あの場に彼氏がいたからあんな風に出来たかもしれないけど、もしいなかったら……」
「だから、呼んだんだよ」
簡単に言い放った彼の言葉に、一瞬耳を疑ってしまった。
「呼んだって……、どういう意味だよ？」

「あらかじめ、電話しておいたんだよ。“彼女、今日男と会うよ”って」
悪びれる事も無く淡々と話す彼に、思わず怒りが込み上げて来る。
「どうして、どうしてそんな事をしたんだ！　そんな事をしなければ、あの二人は別れる事はなかった！」
激しく問い詰める俺に、彼は走らせていた車を止めた。
「じゃあ、夏海は？　夏海は未だに傷が癒えていないのに、あいつは……あいつ等は構う事無く幸せそうにしている！」
普段、穏やかな性格の彼がここまで声を荒げるのは珍しい事だった。
「もう、あんな奴の事なんか忘れたと思っていたのに、この前あんな事が無ければ……」
この前って……。もしかして、先日偶然見かけた彼が槻岡サンを抱き締めていた事と関係があるのか……。

「宇佐美って、やっぱり槻岡サンの事が好きなんじゃないのか？」
冷めたような顔でこちらを見てきたがすぐに笑顔に戻ると、
「そんなんじゃないよ。　言ったでしょ？　夏海は大事な妹なんだ……」
そう言うと、彼は再び車を発車させた。
ただの遊び人と思えば、こうして彼女の事を思って元カレに復習したり……。未だに俺は宇佐美琉依という男が理解できなかった。恋愛感情の無いただの幼馴染みの為に、俺はここまで出来ないと思う。

「夏海に会ってやってくれる？あれから、ずっと部屋に引きこもってしまって大学も休んでいるんだ」
「俺じゃなくても、宇佐美の方が……」
車を走らせながら、彼は軽く笑っていた。
「俺ができる事はここまでなんだ。　夏海にはもう俺がいなくて

も大丈夫だから」
彼の言っている意味がよく分からなかった。自分がいなくても……って、まるで彼がいなくなってしまうような言い方じゃないか。
そんな事を考えている俺を、彼は横目で見てまた笑っていた。

しばらくして彼が車を止めた場所の横には、“槻岡”と記された表札の家があった。
「宇佐美……」
「夏海の両親は、アメリカに行っていて留守だから。夏海の部屋は二階の奥だよ」
彼はそう言うと、自分が持っていた彼女の家の合鍵を渡した。少し悩んだがそれを受け取ると、俺は車から降りて彼女の家の門を開けた。

ａｃｔ１３琉依の復讐２（後書き）

いつも読んでいただき本当にありがとうございます！
評価も頂き、本当に励みになります。琉依派と尚弥派というのが、評価の方で書いて下さっているみたいで琉依の方が人気があるのだなと思いました。また、皆さんも琉依派か尚弥派か教えてくださると嬉しいです！！

ａｃｔ１４夏海の告白（前書き）

△月△日

賢一と彼女を見た日から時間が止まっている気がする……。だって、ずっと同じ光景しか頭に浮かばないよ……。どうか早く忘れさせて。

ａｃｔ１４夏海の告白

玄関のドアが開いて閉じた音の後、誰かが廊下を歩く音が聞こえる。両親はアメリカにいるから、琉依が来たのだろう。
賢一と彼女の姿を見た日からずっと部屋に引きこもっている私を、琉依は懲りずに訪ねて来てくれる。
琉依は優しい……。私は本当にその優しさに頼りがちになっている。そろそろ、本当に琉依を自由にしないといけない。

コンコンッ

琉依にしては珍しくノックをするので、どうしたのか？　と、驚いてしまった。普段なら例え、着替えていても構わず入ってくるのに。
「琉依？　どうしたの？　入っていいよ」
しかし、ドアが開いて現れたのは琉依では無く、浅井クンだった。意外な人物に思わずベッドから飛び出してしまった。
「えっ！？　えっ、何で？　どうしてここに？　鍵は？」
質問尽くしの私を見て、彼は思わず笑っていた。
「鍵は宇佐美から借りたんだ。ずっと大学も休んで、部屋に閉じこもっているって宇佐美も心配していたよ」
ほら……、また琉依に迷惑をかけている。
「大丈夫？」
ちょっと気が沈んでいた私に近付いてきて、彼は優しく声を掛けてくれた。
「大丈夫だよ、ありがとう」
琉依だけではなく、彼にまで心配かけさせてどうするんだ……。
「俺さ、宇佐美みたいに槻岡サンの事分かってはいないけど、愚

痴とか話なら聞けるからさ……。何でも話してよ」
彼の優しい申し出に、涙が出そうになる。
「ありがと……」
ダメだ……、やっぱり涙が出てきた。

「私の独り言、聞いてくれる？」
しばらくして、何とか落ち着いた私は彼に尋ねた。彼が頷いたのを確認すると、私は話し始めた。
「私は小さい頃から琉依と一緒にいたから、何をするにも琉依がいないと出来なかったの。それは小さい頃だけじゃなく、今でもそう……。お酒を飲みすぎて潰れた時や、何かあると必ず琉依が来てくれた」
淡々と話す私を、彼は真剣に見ていた。
「そろそろ琉依を自由にしてあげないといけないのに……。私の中にある甘えがそれを行動に出せないんだよね」
琉依は私の保護者ではないのに……。
「でも、一緒にいたからこそ琉依の事が全て分かっているつもり。浅井クン、琉依に呼び出されて賢一と会ったでしょ？」
私の質問に、彼の表情は驚きを隠しきれないでいた。正直な人……。
「やっぱりね。琉依ならすると思ってた。この間琉依とショッピングへ行った時、偶然賢一が彼女と一緒にいるのを見てしまったんだ」
「えっ……」
「もう忘れたと思っていたけど、やっぱりショックだったな」
でも、そっかぁ……。やっぱり琉依が賢一に仕返しをしてくれたのか。どんな風にしてくれたかは分からないけど、やっぱり最終的には琉依に助けられてしまうんだな。
「あのさ、一つ聞いてもいいかな？」

「ん？　何でも聞いていいよ」
彼の質問はだいたい分かっている。きっと……
「槻岡サンは宇佐美の事、幼馴染みとしか見てなかった？」
やっぱりね、そうだと思った。でも、彼にはちゃんと話をしようと思っていたから、ちょうど良かったかもしれない。
「ただの幼馴染みって言ったら嘘になるな。琉依とは付き合ってはいなかったけど、男女の関係になった事もあったし……」
要は……セフレだ。お互いヤりたい時だけの都合のいい関係……。本当はこんな事彼には言いたくなかったけど、彼に隠し事はしたくなかった。いや、出来ないと思った。
「そうだったんだ……」
彼の顔を直視できない……。軽蔑されたかもしれないと不安になる。
「ずっと聞こうかなと思ってたんだ。教えてくれてありがとう」
その言葉に少しだけ彼の方を見ると、彼の表情は私が予想していたものとは違って穏やかな笑顔だった。彼のその表情に、私は安心してもいいのだろうか。

「それじゃあ、来てくれてありがとう」
門の前で、彼に改めてお礼を言った。
「うん。俺、大した事していないけど、それで少しでも元気になってくれたらいいけど」
「話を聞いてくれて嬉しかった。明日から大学にも行くから」
それを聞くと彼は笑って頷き、そのまま帰っていった。私は、そんな彼の姿が見えなくなるまでずっとその場を離れなかった。

深夜、携帯を手にとって電話をかける。
「琉依？　今日はありがとうね」

「……ん？　何の事？」
相変わらずとぼけて返す琉依に、思わず笑みがこぼれてしまう。

ありがとう……琉依。

ありがとう……浅井クン。

ａｃｔ１４夏海の告白（後書き）

本当にありがとうございます！読んで頂けて本当に嬉しいです。さて、次回はとうとう琉依がある行動に出た事が発覚します。一体何が起こるのか楽しみにして頂けると嬉しいです。そろそろこの物語も終わりに近付いています。最後まで頑張りますのでよろしくお願い致します！

ａｃｔ１５衝撃の一日（前書き）

△月◎日
浅井クンの突然の来訪に驚いたけど、私の話を聞いてくれた時の彼の顔はとても真剣だった。そんな彼を見て、やっと元気になれた気がした。琉依にも感謝！　賢一に復讐してくれたと聞いた時は本当に気分がすっきりした。

act15衝撃の一日

翌朝、今までなかった出来事が起こり、思わず驚きを隠せないでいる私……。今まで当たり前のように思っていたから、尚更驚きも大きい。

そんな私は、ただ家の前で呆然と立ち尽くしていた。確かに私の存在をその目で確認した筈なのに、そのまま私の前を通り過ぎて行った……琉依。

いつもなら、大学に行く時は必ず家の前で待つ私を乗せて一緒に行ってたのに。今日は、そのまま走り去ってしまった。

門の前にいたのだから気付かない訳がないと思ったが、琉依は行ってしまったのだ。戻ってくる気配も無い……。

何かあったのかも……そう思う事にして、私は久しぶりに一人で大学に行く事にした。

「おはよう」

「あら、夏海。琉依は一緒じゃないの？」

いつも通り教室で待っていた蓮子の一言は、私を疑問へと導いた。琉依なら、先に到着している筈なのに……。まだ来ていない？どうしたのか？　などいろいろ考えたりもしたが、結局また遊びに行っているのだろうと思う事にした。琉依の事だ、悩むだけ無駄である。

「さぁ？　どうせ、また遊びに行ってるんでしょ」

よくよく考えてみると、琉依はよく私を大学まで送ると自分はそのまま遊びに行ってしまう事が多かった。そう考えると、今朝の一件もやはり大した事ではないのだ。

一限、二限……と講義が終わる毎に、そろそろ琉依が来るのでは？　と思っていたが、その思いも空しく琉依が来る事は無かった。

来ても寝ているだけなのだが、私は今朝の事を尋ねたかった。
携帯に掛けても、ずっと留守電のアナウンスが流れるばかりで、電話の主が出る事は無かった。

そんな事を繰り返している内に、やがて昼休みを迎えてしまった。
いつものメンバーと裏の広場でランチタイムを過ごす為に、荷物を片付けて広場へ向かう。
広場には、すでに伊織と梓と浅井クンが待っていた。
「あら、琉依ったらまだ来ていないの？　仕方の無い子ね」
自分が作ってきたランチを一つ一つ広げながら伊織が呟いた。
「この弁当……。全部東條が作ったの？」
七人分のランチを眺めながら、浅井クンが伊織に尋ねていた。
「そうよ～。みんなのランチは私が毎日作っているのよ。これも私の趣味なのよ」
伊織の嬉しい趣味のおかげで私達はお弁当を作る必要が無くなり、こうして毎日豪勢なランチを頂く事が出来るのである。
「だって、梓に毎日おいしいご飯を食べさせてあげたいもの」
伊織の言葉に梓は照れているのか、顔を赤くして笑っていた。相変わらず仲がいいなぁ……。
「悪い悪い！　お待たせ」
渉と蓮子が遅れてやって来た。そのまま渉は浅井クンの隣に座ると、浅井クンと話し始めた。
このメンバーの中では一番話しやすいのか、浅井クンと渉がよく話しているのを見かけていた。
「蓮子ちゃんも珍しく遅かったじゃない。どうしたの？」
「ん～？　ちょっと用事を済ませて来ただけ～」
梓の問いに、蓮子はおかずを口に入れながら答えた。行儀が悪いと、伊織が蓮子を叱咤する。これもまぁ、いつもの事なのだが……。
「そうそう、聞いて！　昨日ねぇ……」

「大ニュース！　大ニュース！」
私が話し始めた時、広場を走りながら誰かが叫んでいた。広場でランチをとる人は多いので、皆は突然の乱入者に何事かと注目していた。
「まぁ……何事かしら？　騒がしいわね」
伊織が少し苛立ちを見せながら、その人物を眺めていた。
「大ニュース！　国際学部の宇佐美琉依が退学届を出したんだってよ！」
「えっ……？」
静かだった広場に響き渡ったのは、突然の琉依の退学騒ぎだった。

ａｃｔ１６会いたい（前書き）

△月〇日
今朝、いつもの様に琉依を待っていると琉依は私の前をそのまま車で通り過ぎて行った。何かあったのかな？　と思っていたら、昼休みに琉依の退学騒ぎが！　……アンタ何考えているの？

act16会いたい

突然のニュースが広場を駆け巡ったその瞬間、広場にいた人々からどよめきが聞こえてきた。

「え～っ！　宇佐美クン退学しちゃうの～？」

「うそ～っ、やだやだ！」

叫んでいるのは、ほぼ女の子だけど……そうじゃなくて！　琉依が退学届を？

「ちょっと、どういう事？」

蓮子が口に出していたが、もちろん誰も理由を知る訳が無い……。

「渉！」

伊織の声で渉が立ち上がって走ったかと思うと、その衝撃のニュースを伝えに来た男を捕まえてこちらに戻ってきた。

「それじゃあ、詳しく教えて頂こうかしら？」

私たちに囲まれた男は、伊織にそう言われると何故か怯えた様に頷きながら話し始めた。

「お、俺もあまり知らないけれど、たまたま事務所の前を通った時に事務所の人間が国際学部の教授に話していたのを聞いただけで……」

事務所……。その言葉が脳裏を駆け巡った。以前、浅井クンの正体について話をしていた時、突然用事があると立ち上がった琉依……。あの時、確かに事務所へ行くと言っていた。

「まさか、あの時に……」

確かに、あの時の琉依の様子がいつもと違う事は感じていた筈なのに……。それでもまた元の琉依に戻ったからと、その時は気にしていなかった……。

「あっ……」

どうして、あの時に琉依に聞かなかったか……。
“事務所で何してきたの？”と……。
「とりあえず、琉依に連絡するんだ」
渉はそう告げるが、さっきから何回も電話を掛けているのに全く繋がらなかった。
「夏海ちゃん？」
梓が心配そうに声を掛けてくる。無理も無い……。そんな風に見られるほど、私は動揺を隠せないでいた。
「あ……私、教授に聞いてくる。何か知っているかもしれないし……」
立ち上がって歩こうと思っているのに、思うように足が動いてくれない……。
「俺が行って来るよ」
私の肩を軽く叩いて、浅井クンが国際学部の研究室へと走って行った。そんな彼を見てもまだ動けないでいる私を、梓が座らせてくれた。

「あの時よね……。私たちが尚弥の事を話していた時に、琉依は事務所に退学届を……」
伊織は頭に手を当て、俯き呟いた。
「琉依は私達の前では弱さをさらけ出したりしないから……」
仲間の悩みは聞いても、自分の事を話すのは少なかった琉依。今回、退学する事も聞かされていなかった。
「ナオトは？　兄貴なんだから何か知っているだろ？」
「それが、ナオトは今朝からアメリカに行ってるのよ」
渉の思いつきも空しく、私達はまた黙り込んでしまった。
しばらくして、やっと浅井クンが戻ってきたので、彼が得た情報

を聞く事にした。
「国際学部長に話を聞いてきたよ。突然事務所に現れたと思ったら、何も言わずに退学届を置いて行ったって……。連絡を取ろうにも、繋がらないから困っているみたいだよ。だから、大学側も退学届は保留って形にしているみたいだよ」
長い付き合いだが、今回ばかりは琉依の事が分からなかった。何をしたいのかも……。
「今回受理されなかったのは、やはり宇佐美がトップの成績保持者だから、大学側も出来れば宇佐美を退学させたくないらしい」
だがこれには期限があり、一週間以内に琉依本人が大学へ来て取り消しを申し出なければ、琉依の退学は決定的になるそうだ。
「しかし、肝心の琉依の居場所が……」
また振り出しに戻ってしまう。私達は仲間の筈なのに、仲間が行きそうな場所すら分からないなんて。

結局、この日は何も収穫が得られないまま、それぞれ帰る事になった。琉依が行きそうな場所をずっと考えていたが、家の前に着いても結局何も見当がつかなかった。
琉依は私の事を何でも知っているのに、私は琉依の事を何にも分かっていない……。分かっていると自己満足していただけなんだ……。

玄関の扉を開けたその時、電話の着信音が静かだった家中を響き渡った。
「はい……」
「……」
沈黙でもわかる……。琉依、何か話して……。

「……会いたい」

かすれた琉依の言葉に、私は迷う事無く家を飛び出して琉依の家に向かった。

ａｃｔ１７これも恋の始まり？（前書き）

△月〇日
琉依が退学届を提出した事が発覚して、何も知らされていなかった私達は大騒ぎ。一体何を考えているのか、いい加減分からなくなってきたその時、琉依から電話が……会いたいよ。

act17これも恋の始まり？

合鍵で玄関の扉を開けるが、中は本当に琉依がいるのかと思うくらい静かで真っ暗だった。
電気を点けて、階段を上がって琉依の部屋の扉を開けると、隅の方で琉依はただ座って俯いていた。

「琉依……？」
私の呼びかけに、琉依は俯いていた頭を上げるといつもと同じ様に笑いかけた。
“会いたい”　なんて滅多に言わない事を言うくらい弱気になっているくせに、無意味な強がりを見せる琉依が更に弱々しく見えた。
そんな琉依の側に近付き座ると、小さく感じた琉依の体を腕で包み込んだ。
「いつもと立場が逆だね」
小さく笑いながらまだ強がりを見せる琉依だけど、やがて自分の弱さを素直に出してくれたのか、何も言わずに私に体を預けてきた。

「どうして、急に退学届なんか出したの？」
しばらくして、琉依が落ち着いたのを確認してから尋ねた。
「急じゃないよ。前々から思っていたんだ」
落ち着いても、まだ琉依は私から離れずに答えた。
「そんな素振り見せてなかったじゃん」
「見せたりなんかしないってわかってるでしょ」
私の言葉に意地悪く答える琉依は、いつもと変わらない琉依だった。そう、琉依は決して人に弱さをさらけ出したりしない。だからこそ、私は琉依の苦しみを分かってあげる事が出来なかった。

「心配したんだから。今朝も私の事見えてたくせに、そのまま通り過ぎて……」
「大事な用があったんだ……」
「大事な？　私よりも？」
「夏海よりも」
意地悪な琉依の笑顔に一瞬気が抜けたが、自分よりも大事な用事が気になる。

「夏海」
「な～に？」
「ギュってしていい？」
「……はっ？」
いつもなら、何も言わずに抱き締めて来るくせにこうして了解を得て来るところを見ると、やはり今日の琉依はおかしかった。
「嫌って言ってもするくせに……」
そう呟くと、琉依はまた意地悪な笑顔を見せてきた。
「じゃあ、遠慮無く」
本当に抱き締めてくる琉依に呆れたりもしたが、どこか様子がおかしい琉依に何でもしてあげたいと思ったので、何も言わず身を任せた。

「夏海……」
「な～に？　今度は何をして欲しいの？」
今日くらいは我がままを聞いてあげようと思っていた私は、琉依の呼びかけに笑顔で返した。

「俺……、イギリスに行くんだ」
突然の琉依の告白に、思わず顔を上げて琉依の表情を確認したがさっきまでとは違って真剣なものだった。
「な、何言ってるの？」

あまりにも突然すぎて、今の状況を把握できていない私を琉依は少し寂しげな顔で見ていた。
「語学の勉強に行きたいとずっと思っていた。大学では視野が狭すぎる。もっと広い所で……」
「そんな事を聞いているんじゃない！　そんな事じゃない……」
どうして“今”なのか？　私の気持ちが不安定な時に……、どうしていなくなるって言うの？
あぁ、琉依が困った表情を見せている。これ以上琉依を困らせたらダメだと分かっているのに。琉依を自由にしてあげないと……。琉依を……、自由に……。
「出来ないよ……。出来ない……」
流れてくる涙を抑える事無く、琉依に訴えかけた。
やっぱり出来ないよ……。琉依が自分から離れるなんて……。
「私、まだ琉依を自由にできる自信がないよ……」
改めて自分の弱さを思い知らされる。小さい頃から琉依がいないと何も出来なかった私……。どうして、こんなに自分は甘く弱い人間なのか。どうして、今更気付いてしまったのか……。一番近くにいたのに……。失いかけてから気付いてしまうなんて……。

「俺を自由に……しなくていいよ」
子供みたいに泣きじゃくる私の頭を撫でながら答える琉依を見上げると、さっきまでの寂しげな表情から穏やかな表情へと変わっていた。
その表情から、琉依が何を考えているのか分からなかい私は、ただ琉依の顔を見上げるしか出来なかった。
「一緒について来てくれる？」
一瞬、琉依が何を言っているのか分からなかった。本当に分からない事ばかりなので、この言葉の理解にも苦しんだので思わず、

「はいっ？」
気の抜けた私の返事に、琉依も気が抜けたのか笑っていた。
琉依は一体どういう意味を込めて言っているのか。
「俺も、これ以上夏海を自由にはしてあげないから」
その言葉を聞いて初めて気がついた、琉依のさっきの言葉。でも、私の勘違いかもしれない。だから、ちゃんと伝えて？
「俺は夏海が好きだよ。もう、人にも自分にも嘘がつき通せないくらい」
「琉依……」
私の返事を待たずに、琉依が抱き締めてきた。
一番近くにいて当たり前だった存在……。やっと気付いた琉依の大切さ。ずっと側にいたい……いて欲しい。そして、私を必要として。

「夏海が俺を嫌いでも、ずっと側にいてやる。他に好きな男がいても俺に振り向かせてみせるよ。ずっと夏海がよそ見を出来なくなるくらい、誘惑し続けるから」
いつもの遊び人の顔とは違うのが分かる。それでも、やっぱり琉依が言うとおかしくなる。
「すごい自信……。どこから出てくるの？」
「ん？　俺だから出てくるの！」
琉依の答えに呆れもしたが、琉依らしいと笑ってしまいそのまま琉依の背に腕を回した。

「いつか、そんな余裕を見せられなくなるくらい私に夢中にさせてやるから」
無理な強がりを見せた私を、琉依が笑顔で抱き締めた。
今までずっと一緒にいたのに、失いかけてからやっと気付いたこの気持ち……。

これも恋の始まり？

ａｃｔ１７これも恋の始まり？（後書き）

いつも読んで頂き、本当にありがとうございます！　とうとう琉依が自分の気持ちに正直になりました。これから夏海がどの道を選ぶか、完結まであと少しですが見守って下さると嬉しいです。

ａｃｔ１８琉依の決意（前書き）

△月〇日
やっと見つけた琉依は、まるで子供のように小さく見えた。いつもは自分の弱さを見せない琉依なのに今日はこんなにも弱さをさらけ出している。そんな琉依が愛しくなってしまう。失いかけてから初めて気付いたこの気持ち……。もう離さないで。

act18琉依の決意

今まで気付かなかった気持ちに素直になった翌朝、目が覚めると隣では琉依がまだ眠っていた。そんな琉依を見ると、昨日の事は夢ではなく現実なのだと改めて実感した。

今までよく琉依とはこうして一緒に寝ていたが、こんなにも琉依が愛しいと思ったのは初めてだった。

「見てなよ……。絶対に夢中にさせてやるから」

そう呟いて、まだ夢の中の琉依の前髪に触れた。

「期待していますよ」

琉依は突然目を覚ますと昨夜同様、意地悪な笑顔を見せてきた。

「お、起きてたの？」

「当たり前でしょ？　やっと手に入れた俺の彼女の寝顔を……」

ボスッ！

琉依が言い終わる前に、枕で琉依の顔を殴った。

頭ではなく顔を殴ったのは、赤くなっているであろう自分の顔を見られるのが嫌だったからだ。

「今日、大学行くでしょ？」

「行くけど、みんなに打ち明ける為だけで、終わったら帰るよ」

着替えながらそう答えると、琉依はドアの方へ歩いて行った。だが、すぐに足を止めると、

「それに、浅井クンにも謝らないといけないし？」

「浅井クンに？　何をしたの？」

琉依は再び歩き出すと、階段を降りながら

「ちょっと、彼に嘘をついてしまったんだ」

そう答えた琉依の言葉の意味を、私は理解できなかった。

一階に降りると、琉依は携帯で伊織に電話している。一限をさぼって、喫茶店に集合していてと言う琉依の顔は何かを吹っ切れた清々しい表情だった。

大学へ向かう車の中でも、これから仲間に別れを告げるとは思えないくらい明るい表情の琉依……。そこから、琉依の決心は固いものなのだと思った。

大学に着いて車から降りて喫茶店に向かっている間、琉依と手を繋いでいたが、やはり緊張しているのか琉依の手が少し震えていた。

そんな琉依の弱さを、私は気付かないフリをして一緒に歩いた。

「琉依！」

喫茶店に入った瞬間、伊織が立ち上がって叫んでいた。他のみんなも次々と席を立つ。そんなみんなを、琉依はただ寂しげな表情で見つめていた。

「おはよう！」

何となくぎこちなかった雰囲気の中、突然梓が琉依に大きな声で挨拶をしていた。梓にしては珍しいと、思わず全員の視線が梓に向けられる。

「あっ、おはよう……」

恥ずかしくなったのか、急に声のトーンを下げて再び言う梓に琉依は近付くと、いつものように梓に抱きついた。

「やっぱり可愛いなぁ、梓は」

「きゃ～っ！　きゃ～っ！　きゃ～っ！」

琉依に抱き締められながら必死に抵抗する梓を、伊織がまたいつものように琉依を殴って助けていた。

そんな様子を見ていると本当にいつもと変わらないのだけれど、そんな楽しい雰囲気がこれから琉依の一言で崩れてしまうのだ。

「ごめんね、心配掛けて……。みんなにはもっと早くに言うべきだったね」
琉依が話し始めると、さっきまでの賑やかな雰囲気から一気に静かになった。
「みんなも知っていると思うけど、先日……退学届を出してきました。俺は……語学勉強の為に、来月イギリスに行きます」
琉依の衝撃の一言に、みんなは驚きを隠せないでいた。
「えっ……」
「マジかよ……」
次々と声を出すが、みんなはまだ琉依の決意を上手く理解出来ないでいた。そんな中、琉依はずっと私の手を離さないでいた。
「みんなにはちゃんと言っておきたくて、こうして集まってもらったんだ」
「どれくらい、イギリスにいるつもりなんだ？」
浅井クンの問いに、琉依は少し考えていた。そういえば、私も聞かされていなかった。
「三年は、いようと思っている。中途半端では投げ出したくないから」
もはや琉依の決意は固いと分かっていたみんなは、琉依を止めようとする言葉を言う事は無かった。言っても、簡単に意志を曲げようとする琉依では無い事くらいみんなは十分分かっている。
「頑張ってね。琉依の夢を現実にする為に……」
寂しげな表情で言う梓を、琉依は笑顔で返した。
「寂しくなるわね……。仲間が遠くへ行ってしまうのは」
それは琉依も同じ思いだと思う。琉依にとって、みんなは大切な仲間……。長い時間を共に過ごした仲間との別れに、とても悩んだに違いない。
「ちゃんと日本に帰ってくるから……」
みんなは笑顔で返しているけど、きっと内心ではこう思っている……。

琉依は三年なんかでは帰っては来ないと……。

「俺、事務所に行って来るわ。退学届をちゃんと受理してもらってくる」

琉依はそう言って席を立ち上がると、去って行った。

琉依……、何か忘れていない？

ａｃｔ１８琉依の決意（後書き）

１８話終了です！本当にありがとうございます！！読んで頂き、本当に感激です！そろそろ、終わりが見えてきたのでシリーズ第二弾の準備も始めるつもりです。完結までどうぞよろしくお願い致します！

act19本心？

琉依が事務所に行ってかなりの時間が過ぎているのに、一向に戻って来る気配が無い。少し心配になってきたので、喫茶店を後にして事務所へと向かった。

少し歩いたところで琉依の姿を見つけたが、誰かと話をしている様子……。少し近寄って声が聞こえる所で座って覗くと、琉依が話している相手は浅井クンだった。

「君には謝らないといけないね」

今朝、琉依が言っていた浅井クンに謝らないといけない事の話をしているの？　それは私もずっと気になっていたから、ますます近付いて話を聞きたくなる。

「何を？　別に謝られるような事無いでしょ？」

少々、無愛想に答える浅井クンに琉依は笑顔で話し始めた。

「あるよ。だって、俺は君に嘘をついていたんだ」

「嘘？」

浅井クンにも心当たりが無い様子……。一体、琉依は何を言おうとしているのか。

「そう、嘘。俺ね、夏海が好きなんだ。この前、君には妹だの姉だの言ってたけど、ホントはちゃんと一人の女性として見ていた」

思わぬ琉依の告白に、隠れて聞いている私が赤面になってしまう……。やっぱりアンタは……

「バカ……」

呟きながら、笑顔で話す琉依を見た。やっぱりアンタは外国に行って、その恥ずかしさだらけの中身を徹底的に治した方がいいかもしれないわ。

「どうして、今になって俺に言うの？」
彼の言う事も一理ある。別に言う必要の無い事では？と、私も思った。……て言うか、わざわざ言わないでよ！　恥ずかしいから。
「もう、自分に嘘をつくのをやめたんだ。あと、君には言っておかないといけないって思ってたし」
琉依の言う事が全く分からなかった。なぜ、彼に言うのか……。
「一度は離してしまった大切な存在……。だけど、二度目は無い。誰にも渡さない……もちろん、君にもね」
「えっ？」
んっ？
思わず、浅井クンと同じリアクションをしてしまう。恥ずかしい事ばかり言っているかと思えば、最後の言葉……。どうして、そこで浅井クンの名前が出てくるの？
「何で……俺が？」
ほら、浅井クンも困っている。琉依の大バカ！　一度寝たくらいで恋愛感情が出る訳無いのに……。やっぱり全身を治療してもらった方がいいかも……。
「自覚ないんだ。夏海が好きなくせに……まぁ、いいや」
自覚も何も……ある訳無いでしょ？　そりゃ、私も以前はもしかしたら？って思ったりもしたけど、自意識過剰さに呆れるだけでしたよ。ホント、出来るなら今すぐにでも琉依を黙らせたい！

「イギリスの話、槻岡サンはどうするの？　彼女には先に話していたんでしょ？」
変な方向に進んでいた話を、浅井クンが上手く逸らしてくれた。
「もちろん話したよ。でも、どうするかは夏海が決める事でしょ？」
一瞬、琉依の言葉に言い表す事の出来ない冷たさを感じた。

“夏海も連れて行くよ”

そう言ってくれるかと思っていたのに、琉依はそんな私の期待を裏切った形で浅井クンに答えた。

「一緒に連れて行くって言うと思っていたのに」

私もそう思っていた……。だから、さっきもみんなの前でそう言ってくれると思っていたのにな。

「今回の件は、俺が決めた事なんだ。確かに夏海にはついて来てと言ったけど、それは強制じゃ無い。決めるのは夏海なんだ」

決めるのは私……か。私は、無理矢理にでも連れて行くと言って欲しかったな。でも、そんな事を言う奴じゃないのは分かっている。自分の意思を持たない人間を嫌いな事も知っている。

「夏海には、自分にとって最良の選択をして欲しいんだ」

こんなにも、自分の事を思ってくれる琉依が愛しくなる。それなのに、自分は何をしているのか……。

「バカみたい……」

呆れてしまって涙が出て来る。こんなにも自分が愚かだと……と、急に背中辺りに寒気が走る。後ろを振り返ったらいけないような……。

「俺様の話を隠れて聞いているとは、いい度胸ですねぇ」

いつの間にか、話を終えた琉依が後ろに立っている……。

「たまたま、通りかかったもので……」

振り返る事も出来ないまま、訳の分からない言い訳を告げた。

「だったら、そのまま通り過ぎていなサイ！」

おっしゃる通りです。何を恥ずかしい真似をしていたのか……。

「ずっと気付いていたの？」

「当たり前でしょ。俺が何かを言う度に、夏海が動揺して動くから笑いを堪えるのに必死でしたよ」

笑うって……。こっちは琉依の気持ちに改めて愛しささえ感じていたのに、アンタは笑いを堪えていたなんて。

「でも、俺がさっき言った事はすべて本心だよ。それはわかってね」

昨夜は一緒に来てと言っていたのに、今のが本心？　本当は何を考えているの？

でも分かるのは、琉依が真剣に私の事を考えてくれているという事。だから、私も真剣に考えないといけない。自分の事くらい自分で……。

「うん……考えるよ」

私の答えに、琉依は笑みを浮かべていた。

ａｃｔ２０それぞれの夢（前書き）

×月〇日
琉依がみんなにイギリスへ行くことを告げてから数日…、ちゃんと考えるからずっと琉依とは会っていない。その間に琉依はちゃんと自分の未来に向けて準備しているに違いない。頑張っている琉依の為にもちゃんと考えないといけない……いけないのだけど……。

act20それぞれの夢

琉依の衝撃の告白から数日が経ったが、私達はいつもと変わらない日々を過ごしていた。ただ、今までと違うのはその場に琉依がいないという事……。

琉依が正式に退学を申請した時、やはり教授達から止められたらしい。だが、そんな教授達の熱意よりも琉依の決意の方が強かった為、しぶしぶ受理していたと琉依が教えてくれた。

あれから、琉依は着々とイギリスへ行く準備をしている。困らない程度の英会話は出来ていたし、パスポートも持っている。荷物を整理して、送るだけの準備……。琉依は自分の夢を叶える為にちゃんと行動している。

でも、私は？

私は何の為にイギリスへ行くのか。琉依と一緒にいたいから？

それなら、自分は何をしたいのか琉依に言える？　自分も琉依のように夢があると、琉依の前で堂々としていられる？

「なっつみ～！　さっきから何、ボーっとしているの？」

考え事……。自分のこれからの事を考えていました。そういえば、図書館で梓と蓮子と調べ物してる途中だった。

蓮子は梓と顔を合わせている。ふと、蓮子が持っていたカタログに目が移った。

「介護士……？　蓮子、アンタ介護士になりたいの？」

「まぁね。一応、社会学部で福祉を学んでいますから？」

梓は医者になりたいとずっと言っていた。伊織はデザイナー、渉

は体育教師……みんな、ちゃんと夢を持っている。
自分一人が置いていかれてる気がした。私も昔から得意だった英語を生かした仕事に就きたいと思って、国際学部を受験した。それなのに、みんなよりも夢に突き進めていない……。
「みんなも頑張っているんだね」
「だって、ずっとやりたいと思っていた事なんだもん。中途半端では投げ出したくないからね」
中途半端……。梓が言ったその言葉は琉依も言っていた。

「あれ？　何しているの？」
三人で夢について話をしている中、浅井クンが大量の資料を持ってやって来た。資料には、弁護士という文字がたくさん記されていた。
「尚弥、あなた弁護士になりたいの？」
蓮子が尋ねると、浅井クンは資料を机の上に乗せて梓の隣に座った。
「うん。だから、法学部に編入しようと試験勉強中」
何にも興味が無いと言っていた浅井クンもちゃんと夢に向かっている。また、置いていかれているよ。
「凄いね！　弁護士の勉強は大変そうだから頑張ってね」
「倉田の医者になる夢も凄いよ。俺も“影の浅井”から表に出れるように頑張るよ」
こうしてみんな夢に向かって頑張っているのに、自分は何をしているのか……。自分のしたい事もわからないまま、琉依について行こうとしていた。私は、また琉依に甘えてしまう所だったんだ。

「槻岡サンは、どうするの？」
浅井クンが尋ねてきたこの質問の意味は分かっている。
“宇佐美とイギリスへ行くの？”
この間までなら、笑顔で頷いていたはずだ。でも、今は……。

「君の未来は、宇佐美や他人ではなく君自身が決める事なんだよ」
彼の言葉には、どうしていつも私の心を動かすほどの力があるのか……。
「うん、ありがとう」
本当に不思議だね……。彼のおかげで、さっきまで落ち込んでいたのがもう元気さを取り戻している。

図書館を出て蓮子たちと別れると、バッグから一枚の紙を取り出した。

“退学届”

そう書かれた紙を確認すると、きれいに折って再びバッグの中に入れた。そして、歩きながら携帯を取り出して電話を掛ける。

「琉依？　今から家に行ってもいい？」
琉依から了承を得ると、電話を切って琉依の家へ向かう。

私はやっぱり琉依が大好き……、一緒にいたいです。
心の中に一つの決意を秘めて、私はあなたの家に向かう。ちゃんと考えた私の気持ちをあなたに伝える為に……。

好きだよ、琉依。
これからもあなたを愛している……。

ａｃｔ２０それぞれの夢（後書き）

２０話完了です！　本当にありがとうございます！
これからも頑張りますので、よろしくお願い致します！

ａｃｔ２１最高の殺し文句（前書き）

×月〇日
琉依とイギリスへ行こうか悩んでいる時、みんなが夢へと向かっている事に少し不安を覚えた。自分だけが取り残されているって……。
そんな気持ちの中、私はイギリスへ……

act21最高の殺し文句

インターホンを押さずに、合鍵でそのまま琉依の家に入る。いつもと変わらない事なのに、今日は緊張していた。

二階の琉依の部屋のドアを開けると、中にはすでに荷物が入った段ボール箱がたくさん積んでいた。生活感の無い殺風景な部屋の中で、琉依は一冊のアルバムを見ていた……って、

「こ、こらこら～っ！　どこから引っ張って来たの！　恥ずかしいから捨てなさいよ！」

琉依が見ていたアルバムは、幼い頃の私と琉依の写真がたくさん収められた物だった。恥ずかしいから、それを取り上げようとしたが琉依はそれを拒んだ。

「何で？　こんなにも可愛いのに。本当、何で気付かなかったんだろうなぁ。君は妹なんかじゃないよって」

アルバムを見ながら、琉依は呟いていた。

また……恥ずかしい事を平気で言うんだから。

「今頃、私の魅力に気付くなんて遅いわね」

「そうだね」

笑って答える琉依を見ていると、言っている私が恥ずかしくなってくる。

「琉依、今から真面目な話をするから聞いてね」

そう言うと、琉依は見ていたアルバムを閉じて私の方を見た。琉依の真っ直ぐな目に、思わず自分の決意が揺らぎかける。

「私、自分が思っていた以上に琉依が私の事を考えてくれていた事、すごく嬉しかった。だから、私もちゃんと考えたよ。これから

の事を……」
落ち着きながら話を始めた私を、琉依は黙って変わらない真っ直ぐな目で見ている。
「一緒にイギリスへ行こうと言ってくれて、本当に嬉しかった。琉依は私を必要としていてくれてるって、すごく嬉しかった」

……好きだよ、琉依……好き。

「私は琉依が好きだよ。一緒にいたいです。自分の手が届く所に琉依にいて欲しいと思ってる。だから……」

……好き。この気持ちは変わらない。

「だから……、一緒にイギリスへは行けない……」
私の言葉に琉依は驚きもせず、何も言わずただ私を見ている。私の好きなその目で……。
「琉依が好きだから、本当は行きたい。けど、行ったらそこでまた琉依に甘えてしまう。それに、自分がイギリスにいる意味を堂々とみんなに言えないから」
笑顔で私の話を聞いている琉依……。その笑顔にはどんな意味が込められているの？
「だから、こっちで私は頑張るよ。自分がしたい事を自分で決めて、現実にする為に頑張るから……。琉依の隣で堂々と出来るようになったら……出来るように……」
やばい……ちゃんと言うつもりだったのに、涙が溢れてきた。涙なんか見せても琉依には通用しないから無駄なだけなのに。
必死に涙を止めようとしてもすればする程、自分の意志に逆らって流れてくる。

そんな私の流す涙を、琉依が優しく拭った。そんな時も、琉依は

何も言わない。
私は琉依の手を自分の頬から離すと、改めて琉依の顔を見上げた。
「琉依の隣で堂々と出来るようになったら、イギリスに行くから」
琉依の顔が、少し明るくなったのを私は見逃さなかった。
「私がそっちに行くまで何年かかるか分からない。もしかしたら、その間に琉依がイギリス女と付き合ってしまうかもしれない……」
琉依はうんうんと頷いている……（やっぱり、あんたは国際的バカだわ）でも……

「でも、そうなったら今度は私がアンタを誘惑してやる」
一瞬、琉依の片眉が上がった。そんな事を構わず私は琉依のシャツを掴み、琉依を自分の方に引き寄せた。
「アンタに別に好きな人が出来ても、もう一度振り向かせて今度は二度と離れられなくなる位、魅力的な女になってやるから」
うまく言えてるのかな……。こんな強気な事を言っていても、心の中では心臓がドキドキしている。そろそろ何かを言って欲しいのですが……。
「……あの～、琉依さん？」
俯いていた頭を上げると、琉依は急に抱き締めてきた。突然の事に私もただ驚く事しか出来なかった。
「夏海からそんな言葉が聞けるとは思わなかったよ。……でも、最高の殺し文句だね」
そう言う琉依は、私を抱き締めていた手にさらに力を込めていた。
逆に私は、さっきまで強気な事を言っていたのに言い終わった途端、急に力が抜けてしまった。
「待ってるよ。魅力的な夏海に負けないように俺も頑張るよ」
しばらく会えない分、今日からしっかり琉依に甘えてやる。そして、甘えさせてあげる。

日本とイギリス間の超遠距離恋愛が待ち構えている。不安こそあ

るが、私はそれよりも次に出会った時の琉依の驚いた表情を見たい楽しみの方が強かった。なんて前向きなんだろうね。

大丈夫！　私は頑張るから。

琉依に甘えてばかりいた私を卒業して、いざ魅力的な私へ！

act22大切な恋人と仲間へ…

「それでは、琉依の夢への第一歩に乾杯！」
琉依のイギリス行きを目前にした今夜は、仲間が集まってナオトの店を貸し切りにして送別会をする事となった。
渉の一声でみんなはグラスを高く上げると、琉依の未来に乾杯した。

先日、琉依に宣戦布告（？）してから、私は少しずつ自分を変えていく準備をしていた。
「待ってるよ」
と、言った琉依に少しでも追いつく為に努力は惜しまない。琉依の予想以上の私に変わるのだから。

「見てなよ、絶対にいい女になってやるから！」
「ちょっと、いい気分になっている所を申し訳ないのですが、今日は琉依の送別会っていうの分かっていますか～？」
一人、変に盛り上がっていた私を伊織が鎮めにやって来た。
た、確かに、今日は琉依が主役だった……。

「じゃあ、琉依！　何か俺達に言うこと無いか？　今なら何でも言っておけよ！」
そう言って渉は琉依の背中を押した。琉依は照れくさそうに私達の前に立つと、一度軽く咳をした。
「じゃあ……、俺からみんなへ一言……」
普段、滅多に見られない琉依の真剣な顔に、思わず私達も真剣な顔になってしまった。一体、何を言うつもりなの？

「もし……、もし、俺が今まで寝た女達が俺の居場所を聞いてきても、決して教えないで下さい！　もう、それだけが心配なのよ！　俺は……」
私が出るまでも無く、すでに伊織と渉が琉依の頭を殴っていた。
本当に、こんなのの為に私は魅力的な女を目指してもいいのかと、今になって悩んでしまう。
「嘘！　嘘よん……。ちゃんと言うから殴らないでよ！」
渉と伊織の攻撃に必死に抵抗しながら琉依は立ち上がると、再び真剣な表情になった。

「俺の大切な仲間にこうして集まってもらえて、俺は本当に嬉しいです。突然の俺の身勝手な行動に快く送り出してくれて本当にありがとう」
琉依はそう言うと、渉の前に立った。
「お前は、目立っていないようで実はみんなを元気にする力があるんだ。これからも、お前の有り余っている元気をみんなに分けてやってよ」
そう言った後、琉依は渉に何か耳打ちをしていた。何を言ったかは知らないが、渉の顔が何故か赤くなっていた。

「伊織、アンタは将来絶対いいデザイナーになりますよ。そしたら、アンタがデザインした服を俺に着させて下さいよ」
頷く伊織は涙ぐんでいた。琉依はそんな伊織の肩を優しく叩いていた。

「蓮子、君は介護士になるんだってね。間違って患者や他の介護士を誘惑しないようにね」
蓮子の肩を叩いて言うと、蓮子も涙を我慢しながら頷いていた。

「梓……。君には一言だけだよ。愛しているよ！」
「きゃ～！　きゃ～！　きゃ～！」
ここだけはいつもと変わらない展開に、一気に気が抜けてしまった。さっきまで涙ぐんでいた筈の伊織が、再び琉依を殴っていた。
「やっぱり……バカ」

「そ、そして、浅井クン……て言うか、尚弥でいいかな？」
伊織に殴られてフラフラの琉依の申し出に、浅井クンは頷いていた。
「尚弥、君とはわずかな付き合いだったけど、この何ヶ月かは一番君とたくさん話した気がする。君はしっかりしているから、これからもみんなをまとめてやってね」
琉依が言い終わると、今度は浅井クンが琉依に何か耳打ちをしていた。浅井クンからの一言に、琉依は笑顔で返していた。男同士の秘密なのか？

そして、とうとう私の前に立つ琉依。優しく見つめるあなたは、私に何を伝えてくれるの？
「……おいで」
そう言うと、琉依は私の腕を引っ張りみんなの前へと立たせた。何が何だかわからない私やみんなは、琉依を見るしか出来なかった。
「頑張るよ。イギリスで必死になって頑張るから。夏海が来る時には、いつものように余裕のある俺で迎えられるようにね」
あ！　このバカ！　そんな事言ったら、みんなが……ほら、驚いた表情で見ている。みんなにはまだ言っていないのに……。大バカ！
「あ、あらあらまあ……。何？　もしかして、あなた達付き合っているの？」
ほら、伊織が聞いてきた。どうするの？　なんて思っていたら、琉依が私の肩を引き寄せた。
「最後に、俺の彼女の夏海チャンです。みんなよろしくねん」

なんて、最悪な紹介の仕方……。怒り通り越して呆れて、気を失いそう……。その前に、力を込めて自分の肩に置いている琉依の手を抓った。

「いてて……。でも、本当に待ってるよ」

みんなの前で、琉依は私を抱き締める。

「愛してる」

みんなには聞こえないように耳元で囁く琉依の告白付きで。

もう一度、その言葉を聞いてみせる。今度はイギリスで……。それまで、どうかこの言葉の効力が消えないように……。

ａｃｔ２２大切な恋人と仲間へ…（後書き）

とうとう、ここまできました。予定では、あと２話で完結です。只今、シリーズ第二弾の執筆中です！こちらの方もよろしくお願い致します。

ａｃｔ２３束の間の別れ（前書き）

恋人同士は、必ず一緒にいなければならないと言う訳じゃない。お互いの進む道が違ったら、離れたらいいだけ……。別にそれが恋の終わりじゃない……。必ずまた会えるのだから、その時にめちゃくちゃ甘えてやればいい。琉依……こんな私の気持ちをアンタはどう思う？

act23束の間の別れ

とうとう、琉依が旅立つ日……

「何ていうか、ここまでみんなが来てくれるとイギリスへ行く実感が全く出てこないよね～」

空港の国際線ロビーでは、琉依がイスに座ってくつろいでいた。そんないつもと変わらない琉依を、冷めた目で見ているみんな……。

「まったく……このバカはイギリス行っても通用するのかしらね」

呆れたように伊織が呟いていた。でも、わかっている。本当はもの凄く緊張しているって事くらい。

「琉依！　荷物預けてきたぞ！」

戻ってきたナオトはそう言うと、琉依にチケットを渡した。

「ありがとう、兄貴」

受け取る琉依の手が少し震えているのを見逃さなかった。やっぱり、不安なんだよね……。初めて行く場所だから、不安も拭いきれないくらいたくさんある筈。

「さて、俺たちは先に屋上に行ってるから。夏海、恋人との束の間のお別れをちゃんとしろよ！」

渉はそう言うと、みんなを連れて屋上へと向かった。

みんなの気遣いで与えられた、私と琉依の二人だけのわずかな時間……。でも、いざとなると何を話したらいいかわからないよ。

「て、手紙を書くから……」

「手紙なんか出しても、返事書かないよ」

早速、イギリス女と浮気する気満々かい……。

「で、電話かけてもいい？」
「だめ。一生出ないから」
う……。琉依の意地悪な仕打ちに思わず涙が出て来る。普通、別れ際にはもうちょっと優しく接しようとか思わないのか……。
「何をするのもダメ！　だって、せっかく夏海が魅力的な女になるのに、会うまでにそれが分かってしまったら嫌ですから」
意地悪だと思ったら、琉依の嬉しい我がまま……。ほら、寂しくて流れていた涙が今度は嬉しくて流れてくる。
ここまで想われている私は、やはり幸せなのかもしれない。
でも、ここでそんな優しい言葉を掛けられたら、飛行機なんて飛べなくなってしまえばいいなんて思ってしまうよ。

―〇〇航空ロンドン行き××便ご搭乗のお客様は……―

しかし、そんな私の願いも空しく無情にも琉依を呼ぶアナウンスが鳴り響く。

「それじゃあ、行こうかな」
手荷物を持った琉依が立ち上がる。

“もう、行ってしまうの？”

そんな一言が言えたらいいのに……。何かがそれを邪魔している。つまらない意地？　こんな時くらい、そんなもの捨ててしまえたらいいのに。

「じゃあね」
あっさりした一言で、琉依は歩いて行く。私の返事を聞く事もなく、早々と去っていく。
なんて、あっさりした別れ方……。本当、琉依らしいよ。

琉依の後ろ姿を見送らずに、私は屋上へと向かう。これもくだらない意地の一つなのかもしれない。けれど、その時だった……。

「なっちゃん！」

琉依の久しぶりに呼ぶ私の愛称に思わず振り返ると、琉依が足早にこちらへ戻って来る。そして、私の前に立ったかと思いきや……。

「……！」

琉依の唇が自分の唇に重なる。そして、ゆっくりと琉依は離れると

「こういう場合、最後はやっぱりキスで締めくくらないとね！」

「る……琉依！」

自分勝手な琉依の行動に、思わず手が出てしまう。そんな私の手を、琉依は簡単に掴むと再びキスをしてきた。

「……行ってきます」

もと来た方を振り返る時に、私の頬にかかった滴……。少し温かいこの滴は、琉依の……

「涙……？」

さっきよりも足早に去っていく琉依。手を振る事もなく、こちらを振り返る事もなく……。

みんなが待つ屋上へ行き、琉依が乗る飛行機を眺めた。

「一緒に行くと思っていた……」

じっと眺めていた私の元に、浅井クンが声を掛けてきた。

「行かないよ、今はね。これから自分を磨き倒して、魅力的な女になってから琉依に会いに行く事にしたから」

大丈夫、例え時間がかかっても必ず行くから……。アンタが痺れを切らして日本に帰って来る前に。

「ありがとう。出会いは最悪だったけど、あなたに出会えて本当に良かった」

目が覚めたら、見知らぬあなたと同じベッドの中……。そこで終

わりかと思いきや、偶然同じ大学だったあなた。
無理矢理飲み会に付き合わせて、愚痴を浴びるほどぶつけた挙句八つ当たりまでした。
でも、その度に私の心を何回も動かしたあなたの言葉は、今でもちゃんと響いている。あなたのおかげで今の私がいるから、たとえ最悪な出会い方でも今では最高の友達。
「俺も槻岡サンに出会えて良かった。何も興味が無かった俺が、今はこうして弁護士の勉強を始めたり、こうして大切な仲間も出来た。本当にありがとう」
ちょうど琉依が乗っている飛行機が離陸した時、私達は握手をした。握手なんてちょっと照れくさい感じもしたけど、自然と行動に出ていた。

「さあっ！　バカを見送った事だし、お昼でも食べに行きましょうよ」
伊織がみんなを率いて屋上を後にする。私は、もう一度琉依が乗った飛行機が飛んでいった方向を振り返った。大丈夫だよ……。すぐに会えるから……。

「せいぜいイギリス女と遊びまくってるがいいわ！　遊んで遊んで、それでも結局は私が一番だと必ず思わせてやるからぁぁぁっ」
既に姿の見えない空に向かって、私は届くはずの無い言葉を叫んだ。そんな私を、伊織が恥ずかしそうに引っ張って行く。

待ってろよ……琉依。

ａｃｔ２３束の間の別れ（後書き）

１ヶ月振りの投稿です！遅くなり、本当にすいませんでした！この作品もあと１話で終わりです。次回作は梓が主役のお話を作っておりますのでよろしくお願い致します！

ａｃｔ２４五年後……夏（前書き）

琉依がイギリスへ行って三年が過ぎたのに、アンタはやっぱり帰ってこなかったね。もしかして、私がそっちへ行くのを待っていたの？　でも、その時はまだ私はアンタに何一つ自慢できることが無かったから行けなかった。……それから更に二年が過ぎた暑い夏……

act24五年後……夏

「槻岡先生、さようなら～」
生徒たちの元気な声が教室内を響かせていた。
「さようなら。また新学期にね」
教壇の上にある教科書や日誌を整理しながら、生徒に返事をする私……槻岡夏海、２５歳。

大学を卒業した私は、教員免許を取得して中学校の英語教師に就任した。
もともと英語が得意な私は、人に物を教えるのも得意という事もあり、そこから教師になりたいと勉強を始めた。そう、“アイツ”と約束したあの日から……。

「ん……？」
職員室に戻り、バッグの中の携帯を取り出すとメールが一件。伊織からだった。

“今夜、Ｎ・Ｒ・Ｎに集合よん”

メールを確認して携帯をバッグの中に入れると、椅子に座って残っていた仕事を片付け始めた。

その日の夜、仕事を片付けた私は急いでＮ・Ｒ・Ｎに向かった。
店の前に到着すると、扉には“本日貸切”と書かれた札が掛けてある。
「こんばんは～」
扉を開けると、既に他のメンバーが集まっていて私を待ち構えて

いた。

「夏海〜！　遅いぞ〜！」

「先に始めてるよ！」

いつものメンバーが口々に声を掛けてくる。

「ごめん、ごめん。ちょっと片付ける物が多くて……」

軽く詫びながら席に着くと、すぐにナオトが飲み物を持ってきてくれた。もちろん、ジュースを。

「じゃあ、夏海が来たから乾杯でもしましょうかね？」

渉の音頭でみんなはグラスを高く上げると

「乾杯！」

の声と共に、グラスを軽くぶつけ合った。

私達はよくこうして、時間を見つけては集まって飲んでいた。大学を卒業してからお互い進む道は別々だったのに、それでも私達の友情は消えることが無かった。

あれから五年……。

伊織は、長年の両親の説得に成功して念願のデザイナーになり、今では世界中を回って多忙な日々を送っている。

梓は、昨年医学部を卒業して現在は研修医として頑張っている。そこでも、小柄な梓は同期の研修医や医者の注目の的で、伊織が毎日ヤキモチを焼きながら心配しているらしい。

渉は、私と同じく教師の道に進んだが、彼は高校の体育教師に就任して毎日生徒たちに負けないくらい元気に走り回っている熱血教師だ。

蓮子は、介護士の試験に合格して一生懸命たくさんの患者さんのお世話をしている。あの男遊びの激しかった蓮子からは、考えられないくらいの変貌に全員驚いた。

浅井クンは、法学部をトップの成績で卒業してから、司法試験もまたトップで合格するという快挙を成し遂げ、今は新米弁護士として勉強中だ。大学時代は“影の浅井”と言われていたが、今では立派に表舞台に立っている。

みんな頑張っている。そんなみんながこうして集まっている中、アンタだけがいない……。私の隣には、主のいない席が一つだけポツンと空いていた。

「まったく……、わかっていたわよ。あのバカが三年なんかで帰って来る訳が無いって事くらい」

伊織がグラスに入っていたお酒を飲み干して、愚痴をこぼした。

あれから……五年。やっぱり琉依は帰って来ない。もちろん、その間一切の連絡も取り合わなかった。

「イギリス女に惚れ込んで、全財産絞り取られたとか？」

渉がケラケラ笑いながら言うと、みんなは思わず納得していた。

「いや、あいつなら逆に女から全財産を絞り取るでしょ？」

カウンターでナオトが渉の意見を打ち消した。確かに、琉依ならそれくらいの事はしているかもしれないわ。

みんながまだ色々な話で盛り上がっている中、私は一人店を出た。

一人でこうしてゆっくり考えたい事があった。

ねぇ、琉依。イギリスで頑張ってる？　私はこうして自分の道を見つけたよ。

琉依がイギリスに行ってから、約束通りまったく連絡を交わしていないけれど、私はアンタが予想している以上の女になれたかな？

寂しいかって？　大丈夫。寂しさなんか感じる暇が無いくらい、

私は必死に頑張ってきたから。涙さえ出てこなかったよ。これには自分でも、強くなったなと驚いている。

家の前に着くと、部屋の明かりが灯っていた。

「ただいま〜」

「おかえり、なっちゃん」

ねぇ、琉依。アンタがいない間に、家に父さんと母さんがアメリカから帰って来たんだよ。二人に琉依の事を話したら、驚いていた……。でも、父さんはいつか私を琉依に取られるって昔から思っていたんだって。親って、そういうのは敏感なのかなって思わず笑っちゃった。

ねぇ、琉依。アンタがイギリスに行ってから五年の間、話したい事がたくさん出来たよ。それを早く話して、琉依がどんな顔をするか……それが、私が今楽しみにしている事。

ねぇ、琉依。私は、もう魅力的な女になれた……？

翌朝、玄関で靴を履くと、振り返って後ろで立っている両親を見る。

「じゃあ、行ってくるね」

門を閉めて道路に出ると、ナオトが車に乗って待ってくれていた。

「ごめんね、手間掛けさせて」

私の言葉に、ナオトは笑顔で返しながら車を発車させた。

車が向かう所は、空港……。

今日、私は旅立つ。行き先は、イギリス……アンタが待っているイギリス。

琉依には秘密にしている。ナオトから教えてもらった琉依が住んでいる家の住所だけを頼りに、私は今から会いに行く。
何も連絡を交わしていないから、琉依の傍には別の女がいるかもしれない。
そしたら、私が誘惑するから。イギリス女よりも日本の女の方が魅力的だと分からせてあげるから。
「待ってろよ……」
でも、間違いなく琉依の姿を見た瞬間、私は泣いてしまうに違いない。そんな私を、例え他に女がいても、琉依は必ず私を抱き締めてくれる。だって、それが琉依の優しさだから……なんて、ただの自惚れかな。

―〇〇航空ロンドン行き××便ご搭乗のお客様は……―

五年前は琉依を呼んでいたこのアナウンスが、今日は私を呼んでいる。

「さぁ、行きますか」

手荷物を持って、私は立ち上がった。
夢を手に入れて、自信もついた私がこれから一番欲しかったものを掴む為に出発する。

あなたを誘惑する為に……。

これからが、私たちの恋の始まり。

ａｃｔ２４五年後……夏（後書き）

終わりました！　最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました！　最後はこんな終わり方でしたが、如何だったでしょうか？　当初の設定からだいぶ話が変わってしまいましたが、こんな恋もありかな？　と、ここまで進めてきました。　また、たくさんの感想・評価を送って頂き、本当に嬉しく思っております！ありがとうございます！　さて、次回は梓と伊織のお話で「花恋舞ーＫａｒｅｎｂｕｌ」を連載していきたいと思っております。夏海の話が２０歳の頃を主にしていたので、次は１９歳……入学したばかりの頃のお話を作っていきたいと思います。長くなりましたが、ここまで読んで頂き本当にありがとうございました！！　　山口維音

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1559a/

これも恋の始まり？～不器用な恋物語～

2010年10月11日23時02分発行